



東京大学駒場博物館秋季特別展

教育者・蒐書家・鑑定人

狩野亨吉 生誕 150 周年記念展

狩野亨吉と「東京大学」

文・丹羽みさと

狩野亨吉は東京大学と縁が深い。

学舎として通った東京大学予備門、そして東京大学・帝国大学。若干三十四歳にして校長を務めた、教養学部の前身である旧制第一高等学校。書簡やメモなど狩野が残した文書類は、東京大学駒場図書館にある。狩野と言えば、東北大学附属図書館の膨大かつ広範な古典籍資料群、狩野文庫が有名であるが、狩野の旧蔵書が仙台の土地へ移ることになったのも、東京大学予備門時代からの交友関係が、その背後にあった。

そこで、東京大学および一高を舞台とした狩野亨吉の逸話を、数点紹介し、亨吉の人となりに迫りたい。なお、文中の「」内は展示番号を指す。

明治十二年（一八七九）九月、狩野亨吉は東京大学予備門に入学する。当時の校長は浜尾新。一学年上には福沢諭吉の息子、一太郎と捨次郎が、また第三十五代内閣総理大臣になった平沼騏一郎がおり、二学年上には哲学館（のちの東洋大学）の創設者井上田了が、三学年上には第四代東京市長となった阪谷芳郎がいた。

狩野と同学年には、生涯の友である澤柳政太郎がいた。澤柳は東北帝国大学の初代総長であり、彼の働きによって大正元年（一九一二）に狩野文庫の購入が決まった。国宝、延久本『史記』孝文本紀もその中に含まれる。また、明治三十一年（一八九八）十一月に狩野が一高校長に着任することになったのも、澤柳のいささか強引な依頼によるものであった^{「五高」}。澤柳は同年七月から十一月の約半年間、一高の校長であり、自身が文部省普通学務局長に着任するに当たって、後任に狩野を推挙した。澤柳の一例を取ってみても、予備門時代の人脈が重要な意味を持ってい

たことがわかる。これは当時、高等教育を受ける人材が限られていたため、必然的に密な付き合いが生まれていたためだろう。狩野の日記にしばしば刻まれる平山信、蘆野敬三郎とも、予備門で出会っていた。

明治十九年（一八八六）九月、狩野は東京大学理学部数学科に、平山と蘆野は星学科に進学する。特に平山と狩野は江戸時代の和算家、関孝和にも関心を持っており、狩野よりも早くに関孝和の掃苔に出向いた平山は、その自慢気な様子を葉書に書いて寄越している^{「青」}。現在も新宿区浄輪寺にある関の墓石には、「宝永五年戊子十月廿四日卒」という没年と、「法行院宗日心大居士」という法名の間に、「贈従四位 時明治四十年十一月十五日」という文字が刻まれている。これは明治四十年（一九〇七）の関孝和二百年忌に、菊池大麓等有志の発起で贈位された記録である¹。狩野はこの二百年忌に際して開催された本朝数学通俗講演会で「記念すべき関流の数学家」という演目で講演を行っており、大学時代の関心がここでひとつの実を結んでいる^{「菟書II」}。

明治二十年（一八八七）の皆既日蝕では、先に観測地である黒磯に滞在していた平山に「特別」に誘われ、現地まで狩野は足を伸ばしている。残念ながら当日は小雨が降る曇天であり、日蝕を見ることは叶わなかったが、平山は鮎ばかりの食事に飽きて、牛肉運搬人として狩野を呼んだというのが「特別」な事情の真相であつたらしく、ともかくも目的のひとつは達成された^{「青6・7」}。このように平山の手紙からは、朗らかな交際の様子がうかがえる。

同学年の蘆野敬三郎からは、後年悲痛な書簡が届くことになる。

狩野が一高に赴任してから五年が経った明治三十六年（一九〇三）五月、一般社会にも衝撃を与えたひとつの事件が起こる。「巖頭の感」という「名文」を残して日光華嚴の滝に身を投げた藤村操の自殺である。藤村の事件に関しては、『万朝報』（明治三十六年（一九〇三）五月二十六日）に掲載された父方の叔父那珂通世の投書がよく知られているが、母

方の伯父である蘆野敬三郎からは、狩野の元に状況を記した書状が届けられた。五月二十一日に行方不明になってから、二十四日には投身自殺が確認されたものの、その遺体が見つからないという悲痛な内容である
〔藤村¹〕。遺骸は二ヶ月後に発見され、青山墓地に埋葬された〔藤村²〕。蘆野と狩野が大学時代に親しくしていたことを考えると、甥の一高入学を旧友の狩野に朗報として伝えていたに違いない。明治三十五年（一九〇二）九月に入学してから、一年にも満たない間に、このような悲報を友人に伝えなくてはならなかった蘆野の心中を推察すると、非常に痛ましい思いがする。

ちなみに、藤村は英法科文科に入学し、同じクラスには「銀の匙」の作者、中勘助や、一高の校長となり、後に藤村の妹と結婚した安倍能成などがいた。

狩野が校長として一高生を見守っていたのは、明治三十一年（一八九八）十一月から明治三十九年（一九〇六）七月までの約七年半である。この間の在校生、特に文科の学生には、藤村等の他、次のような人物がいた。

明治三十二年（一八九九）九月入学、川田順・小山内薫（文科）

明治三十三年（一九〇〇）九月入学、古堀栄・鳩山一郎（英法科）、

三矢宮松（独法科）、補永茂助・森田米松（章平）（文科）

明治三十四年（一九〇一）九月入学、時野谷常三郎・鳩山秀夫・

阿部次郎・郷古潔・岩波茂雄（英法科文科）、

明治三十五年（一九〇二）九月入学、尾崎秀雄・安倍能成・中勘助・

野上豊一郎・藤村操・（英法科文科）、小宮豊隆（独法科独文科）

明治三十七年（一九〇四）九月入学、芦田均・野村長一（胡堂）

（仏法科仏文科）、吉田茂（独法科独文科）、

明治三十八年（一九〇五）九月入学、君島一郎・谷崎潤一郎

（英法科文科）、辰野隆（仏法科文科）、九鬼周造（独法科独文科）

多くの人材を輩出した一高校長時代の中でも、鳩山一郎・秀夫兄弟の入寮問題は、狩野の清廉実直な性格を表すエピソードとして、巷間に広く知られている。

例えば、青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』（中公文庫、一九八七年）にも、「長男一郎が一高に入った時、あんな寮では息子がだめになる、通学をさせるからと言いに来た（中略）彼女がとうとうとましく立てるのをいつものように黙って聞いていた亨吉は、『ここは入寮が前提です。それが気に入らぬとすれば退学届を出して下さい。』（中略）亨吉が自分で語るはずはなく、恐らくは、そばに控えていた谷山生徒監あたりが漏らしたのではないか。私たちが寮に入った時、この挿話は依然として語りつがれていた」と記されている。

息子の入寮を阻止すべく母親春子が直談判に来たものの、狩野は特例を認めず、言下に断ったという。外務次官鳩山和夫の権力にも屈しなかったという狩野の逸話は、母校の自立と自由とに誇りを抱いている一高生にとって、好箇の話柄であっただろう。

確かに、政治的圧力をかけて息子の通学を認めさせようとする鳩山の書簡も残されている〔鳩山²〕。しかしながら、狩野文書に残された鳩山春子の手紙や、当時の寮日誌などを読むと、言下に狩野が断った、というにはやや異なる真相が浮かび上がってくる。

そもそも、一高が全寮制となったのは、鳩山家長男一郎の入学から一年以上経った、明治三十四年（一九〇一）一月のことである。同年の『寄宿寮記録』には、病気や家庭の事情などから、通学が許可されている者も数人いたことが記されている。一高の寮は自治制度が確立されており、通学許可の可否は、寮務舎監や寮委員に一任されていた。一郎入寮については、狩野の「越権行為」が問題となっていることから、校長はそれを追認するという形が取られていたものと思われる〔鳩山³〕。したがって、春子は本来ならば、寮長に直談判に行かねばならなかったのだが、その

ような事情を知るよしもなく、狩野校長に通学許可を求め、一高という組織自体に余計な亀裂を生んだものと思われる。狩野が拒絶したという「噂」は、その亀裂を埋めるための「説話」であつたのだろう。

渦中の一郎は、結局数ヶ月の入寮で済んだが「鳩山⁶」、次男の秀夫は、全寮制が定まった後であつたため、三年間在寮していたようである。春子は秀夫の時にも通学願いの書簡を認めている「鳩山⁴」。そこには、一郎の入寮問題の影響により、今度は秀夫が鉄拳制裁を受けるのではないか、という心配が記され、だから僅かな期間で退寮させ、通学に切り替えることを許可すべきだという主張が繰り返されている。当事者の秀夫は制裁不安を抱えつつも、三年間首席を通した。

最後に、書物を中心とした狩野亨吉と夏目漱石の関係について触れてみたい。

狩野は大学時代には既に蒐書を始めており、古書店とのやりとりが日記にしばしば現れる。狩野は書物を秘蔵することなく、友人や学生など閲覧希望者に貸与した。明治二十七年（一八九四）以降の貸出簿には、「夏目文学士」、すなわち夏目漱石の名前も見られる。漱石が借り出したのは、曲亭馬琴『伊波伝毛之記』であり、本書は東北大学の狩野文庫に所蔵されている。狩野は明治三十六年（一九〇三）、一高の英語講師として漱石を招聘した。この時、独法科独文科にいた小宮豊隆が、後年、東北帝国大学図書館長となったことから漱石の旧蔵書もまた、同大学に寄贈されることとなった。狩野と漱石が一高に奉職していたわずか三年の間に培われた縁であるが、狩野と小宮は、漱石の葬儀において、それぞれ弔辞を読んでおり、その縁は深かったと言えるだろう。

大正五年（一九一六）十二月九日に没した漱石を偲び、岩波茂雄は全集の刊行に尽力した。岩波も狩野・漱石時代の生徒であり、狩野校長を慕っていた岩波は、「先生を金持にさせたい」と言つて憚らなかつた「一高³」。

大正七年（一九一八）から順次刊行された『漱石全集』の扉の書名は、狩野の揮毫による。

高等教育を受ける者の少なかつた時代、文学士と理学士の学位を持つ狩野の学力は高く評価され、金沢の第四高等学校をはじめ、熊本の第五高等学校、東京の第一高等学校、京都帝国大学といった様々な学校に招聘された。時には折角の誘いを断ることもあつた。その中で、最も長く勤めたのが、第一高等学校であつた。母校という愛着もあつたのだろう。八年半という長くはない期間であつたが、岩波茂雄をはじめ、彼を慕う者は多かつた。その魅力を補永茂助の手紙「一高⁴」から引用して、この稿を閉じたい。

竹早町の御邸を訪ひて御取次を願ふときはいつも躊躇致候唯門を出つる時心欣然としていつも始めに躊躇せしことを悔い申候。

注1 真島秀行「関孝和三百年忌と関孝和三百年祭記念事業について」

『数学通信』二〇〇七年二月

本文執筆にあたり、安達裕之東京大学名誉教授および東京大学駒場図書館の方々に御高配いただきました。深謝申し上げます。



明治38年(1905)7月 一部三年二組 生徒集合写真
(前列中央狩野亨吉・左端夏目漱石 部分修正 駒場博物館蔵 [夏目・4])

教育者・菟書家・鑑定人

狩野亨吉 生涯150周年記念展

生涯

【資料群の由来】

はじめに1 狩野亨吉回顧メモ

狩野が半生を振り返ったメモ。内弁慶で美人好き、幼い頃からさして勉強せずとも出来たという。その中で数学だけが不出来であった。その為、大学では数学をまず専攻する。

【翻刻】

「千八百六十五年慶応元年七月廿八日を以て出羽国秋田藩大館に生る、四歳の時生地を出てより未た一度も其地に帰らず、而猶人の言葉を聞たるに非ずして家宅隣近の模様又親戚の家の模様を記憶せり、戊辰の乱全家一度離散シ、余ハ母に負はれハ津軽に落行、遂に能代外戚水野氏に寓す、此間余は一箇の経験をなしたり、即ち余は大館を落行ちきに母に負はれ、それハ何の異変ありとも思はさりしか矢立峠を過る頃余ハ何となき驚怖して頻に泣けれハ母ハ之を推しつめんとて余り泣かハ此谷に捨行へしと云たり、是時余《余カ経験の中にも尤も恐しき事なりき》ハ谷を見たり、其時恐ろしきこと云はんかたなく直に泣ハ止まりたるなるへし、これより鰯澤にて海波の音をきゝ能代にて

種々の経験ハことをハ今猶記憶しをれり、南部の暴徒降を入るに及んで一旦大館に帰り大に病む、次て又秋田に移住す、初め官宅に住し祖父を失ふ後、大館□□の長屋に住し根本氏の塾に通学す、今八才位までの経歴を述へんに初め官宅に住せる頃より父ハ所々の神童或ハ慧児の談を以て吾を勧励せしかハ、余は常に草紙□を聞き、字を習ひ又ハ好て画をかけり、少しも遊戲に心なかりしかバ身体甚よハかりし広小路屋敷に移るに及んで友となす者ハ労働者の子女なりしにも関らず余ハ自由に遊共し却つて学問に心なく屢家にいつはりて塾に行さることありき幾ハくもなくして後、家ハ愛宕町に移り、身は太平小学校の生徒となりて明治九年十二の年まで茲に在り、此間父兄共に東京に出て余を督せる者ハ叔父なり、家に在てハ常に菓子類を求め次姉を悪口すとなしたれとも外に出てハ甚静粛。十歳位の時既に美人を好む、尿道の變化小言にして長者も及はさる処なりし、且別にさしたる勉強も運動もなさゝれとも学校にてハ常一二の地位をしめ身体ハ肥大になりたり、総して記憶力感覚鋭敏、精神不断小事を気にし泣易スく甚た女子に類せりと常評されたり、九年東京に移住し、翌年母を失へ遂て祖母及兄を失ふ、此間番町小学第一中学予備門東京大学を経て帝国大学学士となる、嘗自ら勉強したりと思ふことなし、小学にありしより

大学を卒ふるまで最も鈍なものありき、即数学なり、中学を出るまでハ何事に付て人より劣ると云ふ事非さりしか此一科のみハ甚た不出来なりき。十才の頃にも美女をハ氣を止めて記憶せり、十二才の頃より己の貌の美ならざるを歎せりさて今ハ定かならねと中学を出てし頃なるへし、世に塗りつぶし 云事を初めたり、かねて秋田に在り時より塗りつぶし 存在を知りたりしかハ終に之を観ることをハたせり、如何にして將せりかハ他人の名譽にかゝることあれハ黙すへし、余カ天性ハ強壮なりしかとも精神は不断なりし、余ハ此時既に其害を知りしかとも哀かな之欲を制すること能ハすして塗りつぶし 終に頭痛鬼夢」

はじめに2 行李

八田三喜が保管していた狩野亨吉文書が保管されていた行李。

【秋田太平小学校、そして東京番町小学校へ】

小学1 狩野良知宛書状

明治7年(1874)8月19日
10歳の狩野少年がねだった『筆算訓蒙』は明治2年(1869)に出版された算数の問題集。この頃からすでに数学へ関心があった。

【翻刻】

「残暑之時御尊体益御機嫌克奉恐悦候。此表相

揃無恙乍恐御安枕被遊度奉願上候。一筆算訓蒙
五冊揃老部御調被下度奉願候。尊兄様御吟味被
下間違之なき処御仕送奉願上候。余ハ重て奉申
上候。恐惶謹言

八月十九日

亨吉

尊大人様 膝下」

小学2 下等小学第七級卒業証書

明治8年(1875)1月

入学後一年経った第7級の時の卒業証書。す
べて毛筆で記されている。

小学3 大試業優等につき世界商売往来一部 授与状

明治8年(1875)2月

入学半年後から早くも成績優秀者として表彰
されている。

小学4 証上等小学第八級卒業証書

明治11年(1878)4月

小学5 学業優等につき筆墨紙授与状

明治11年(1878)4月6日

狩野の学力は、上等小学でも十分通用するもの
であった。

小学6 Spencerian Penmanship 4

【東京府第一中学校から東京大学予備門へ】

中予1 東京府学務課報告 第二号

明治11年(1878)8月21日

府立一中には、下等小学卒業者は無試験で入学
できた。狩野は英語で授業が行われる「変則科」
に入学した。後年、夏目漱石は正則科に入学。

中予2 町田忠治書状

明治11年(1878)12月9日

狩野の府立一中変則科入学を祝して、友人より
送られた手紙。

【翻刻】

「芳翰拝瞰如尊命青女伝霜信之候。貴兄益々御
勇健御勤学奉拝賀候。陳ハ一別以降久ク書信ヲ
呈セズ却テ御詢候ニ預リ実ニ畏縮仕候。貴兄御
登京以来頗ニ御進級ノ由且ツ属者変則第一中
学校へ御入学ノ由遙ニ承リ抔喜雀躍ノ至リ。是
レ貴兄幼ヨリ学ニ篤ク書ヲ読ム昼夜ヲ兼テ息
サルノ報ト推察仕候。貴兄今ヨリ十年志ヲ篤シ
意ヲ刻ミナハ青紫ヲ取ル実ニ芥ヲ拾フヨリ易
カラン。是□生力偏ヘニ貴兄ノ為ニ願フ所ナリ。

勿々不具

十二月九日

町田忠治九拜

狩野亨吉様座下」

中予3 退校願 明治12年(1879)9月18日

狩野は大学予備門に入学するため、府立一中
(現日比谷高校)を中退する。

中予4 『東京大学予備門一覽』

明治12年(1879)

狩野は第4級第2組であった。時の主幹(校長)
は浜尾新。同級には、上田万年や生涯の友であ
る澤柳政太郎、平山信がいた。(駒場博物館蔵)

中予5 授業料之儀二付願

明治12年(1879)10月14日

幼年、独身、無産の上、父とは一家を別に構え
ていると学費分納申請書に記されている。狩野
は月々五十銭の分納を許可された。

中予6 『東京大学予備門前本學生徒優劣表』

明治16年(1883)

明治16年6月の第3学期の成績表で、成績順。
第1級には平沼騏一郎、第2級には狩野亨吉・
木村駿吉、第3級には池田菊苗・三好学・三上
参次・丘浅次郎の名が見える。

(東京大学総合図書館蔵)

【東京大学(のち帝国大学)から大学院へ】

大1 『帝国大学一覽』

明治19・20年(1886・1887)

数学科は狩野一人だけだったが、同学年の平山信や蘆野敬三郎(星学科)、澤柳政太郎(哲学科)などは、長い親交を保った。

(国立国会図書館蔵)

大2 受業料減額願

明治17年(1884)9月10日

東京大学理学部入学後も、狩野は貧困を理由に、授業料の減額願いを提出している。こちらも無事に受理された。

大3 Chemistry Rare Elements. Periodic Law Prof. Sakurai

化学教授櫻井錠二の授業ノートである。授業は英語で行われた。

大4 Astronomy

当時は星学があり、寺尾寿による講義であった。

大5 橋田函数試験答案

藤澤利喜多郎による試験答案。Very goodの評価を得た。また狩野は水泳が得意であり、水泳中の頭部を描いた落書きが残されている。

大6 『帝国大学一覧』

狩野は明治22年(1889)、第2年から哲学科に再入学した。同じ哲学科の2年下に正岡

子規があり、英文には夏目漱石が、国文には芳賀矢一がいた。

(国立国会図書館蔵)

院1 大学院入学許可証

明治24年(1891)7月10日

当時も狩野のような理学士・文学士の学位を持つ者は稀であった。

院2 指導教官通知証

明治24年(1891)7月10日

大学院では、数学者菊地大麓、哲学者井上哲次郎、英語教師ルードヴィヒ・ブッセの指導を受けた。

院3 Aesthetic. By Prof. Dr. Ludwig Busse
ブッセの美学講義受講ノート

院4 狩野亨吉大学院退学許可証

明治25年(1892)7月15日

狩野は四高に赴任するため、大学院を退学する。

【翻刻】

「大学院学生狩野亨吉

本月十五日付願退学ノ件ハ聴届

明治二十五年七月十五日

帝国大学総長文学博士加藤弘之」

院5 大屋八十八郎書状

明治25年(1892)7月19日

金沢中学校、則ち第四高等学校に赴任が決まったため、狩野は明治25年、帝国大学院を退学する。帝大には8年間在籍していたことになる。

【翻刻】

「拝啓仕候。時下炎威難堪御座候処愈御清寧ニ為渡大賀之至奉存候。其後ハ御無沙汰ニ打過奉謝候。玆々今度ハ金沢中学校教授御拜命被成驚喜之至奉存候。此事兼て或処より承知仕居候へ共如何ニ半信半疑ニ有之候処今朝慥ニ承知仕後生の為め一大慶事と存雀躍仕候。此御本永々拝読の恩恵を賜り難有存候。不遠御出発と存候ニ付今日御返璧仕候間御落手被成下度候。御多忙の処御迷惑恐入候へ共御出発前ニ一度拝眉仕度存候ニ付大体何日頃御出発ニて何日頃御在宿ニや一寸御知被下度。頓首

八十八郎拝

狩野様」

【青春の帝国大学】

青1 『蔵書記之附曆算書目』狩野良嘉

『塵劫記』など、明治19年(1886)7月までに収集した150点以上の曆算書、および『曆象新書』などの追加資料26点が記されている。

青2 冬期休業中旅行覚

明治24年(1891)1月2日〜7日

鋸山や勝浦、銚子など、房総半島を巡った旅の記録。船から見たスケッチなどもある。

〔翻刻〕

「大加知山沖より三原山を望む」

青3 蔵書律暦別志

狩野が関孝和に関心を持ったのは、明治18年12月に開催されたニュートン祭での講演がきっかけであった。

〔翻刻〕

「蔵書律暦書目弁言」先年東洋学芸雑誌記事曰、元禄頃我国有関孝和者、能数学、古今無比、実壙世名家也、吾欲知其為人、詳其學術、於是是集収関流算法書之意、今茲七月初得割機算法算法雜俎及大圓豁通之三書、□知和算之一端、偶八月中旬出京、遊歴富士箱根而帰、節費用、有余金、当購得算書之資、至今獲書三十四部八十七冊、算法闕疑抄以下算法玉手箱、尚欲普集和算書、以供学史編述之材料也、皆明治十八年九月十三日 狩野亨吉書余ノ関流算書ヲ搜索スルニ従事シタルハ今年ノ初メヨリノコト也。シカシ関氏ノコトヲ耳ニシタルハ昨年十二月廿五日ニウトン祭ニ於テ酒井佐保氏講話ノ序ニ談関孝和ノコトニ及ヒシトキヲ以テ初メトスはヨリ先キ家君架蔵中算学啓蒙測量集成算法

通書等アリ而シテ通書ニヨリテ和算ヲ授ケラ

レタリ此他和蘭陀天文書支那訳書等モアリシ様ナレトモ家君郷里ニテ売却シ玉ヘルヲ以テ今ハナシ同日附記」

青4 平山信端書

明治19年(1886)1月1日

平山が何か「失敬をした」お詫びに、江戸時代の和算学者、関孝和について話し合おうと記されている。お詫びの仕方が独特である。

〔翻刻〕

「Shinnen Omedito1 gatsu 1jitsu Hirayama Shin. Chotto moshimasu, issakujitsu wa hanahada shikiei wo iashimashitayuye owabinagara Ohimano setsu oide Kudasai mashi, Seki no hanashi wo ukagai masu Kara.」

青5 平山信端書

明治21年(1888)11月2日

星学科の平山と飯島正之助が、狩野よりも先に関孝和の墓を見に行った時のハガキ。気の置けない間柄ならではの自慢が微笑ましい。

〔翻刻〕

「只今飯嶋君ト共ニ牛込七軒寺町ニ於テ関先生ニ面会セリ。君ナンゾ先生ヲ叩カザル坊主中々之慾張ト心得タマヘ」

青6 平山信・飯島正之助端書

明治20年(1887)8月10日

8月19日の皆既日蝕観察のために黒磯へ逗留していた星学科の平山と飯島は、(土産の牛肉を携えるはずの)狩野を当地へと誘う。

〔翻刻〕

「僕等ノ旅宿ハ黒磯停車場ヨリ六七町。橋ノタモト

御状拝見○一体野陣馬連は一切構内へ入るを禁ずることなるが君は同級生ノ事ニテ特別と守屋氏云ふ。だから僕等之旅宿へ早く来リ玉ヘ○前に云た通り食ふ物は毎日鮎ノミ御出之節は生牛肉持来レト余等一同云フ但し生牛肉○乾漬ニアラズ。其他モチガシ旨へ物御持参勝手なるべし早々同居者七人(澤田吾一君ハ其一人)」

青7 明治二十年黒磯に皆既日蝕を観る記

皆既日蝕の観測に同行した狩野の日記。日付が19日ではなく、18日になっているが、行程や観測の様子などが詳細に記されている。なお、牛肉は持参した模様。

〔翻刻〕

「黒磯に日蝕皆既を見る記

八月十七日 明日白河新潟一帯の地方日食皆既あり寺尾教授ハ大学より黒磯に出張を命ぜられ観測所を建て星学生を率ゐて測算準備等に従事すること一月余となりぬ。こゝに我師と

我友とを訪ひから日食をも見はやと牛肉及菓子を生産にして午後一時上野発の汽車に乗る。黄昏黒磯ニ着く。上野にて白河に行かんと云へし木村氏駿吉等も亦黒磯ニ下る。我ハ直に寺尾教授一行の宿するところを訪ひ宿とる。皆こゝに宿るもの観測者寺尾教授平山氏信飯島氏正之助水原氏進三郎及其附従者を初めとして理学士酒井佐保同吉武栄之進同平山順澤田吾一及余なり(中略)

十八日 皆早朝より起出て、器械の整置に従事す朝より一天拭へたるか如く晴れ渡り日輪炳耀として移る喜はさる人としてハなし。東京よりの観覧者も続々集まる。渡邊総長も来る。正午に近きころ那須岳の肩より白雲細く突昇すと見えしか次第次第に高く長く引く其様手を延ハして蒼穹に物書かんする勢あり怪むへし。ベルシヤザル何所にかある嗚呼天將に日月の会合を隠蔽せんとするなり。ダニエルなきも其意を知るへし止ぬるかな。岫を出るの雲漠々天に横行し小雨をさへ降らす。雲屏時に僅に開いて日月相擁するを示すも忽ちにして又閉つ食甚の時些の消息をも知らしめず。唯暮色暗然として茅蝸頻に鳴く。既に凋落せし心氣をして更に寂寥を感じしむ。今はとて人々思ひ思ひに帰京の途につく。我ハ黄昏出発の臨時汽車に乗る。渡邊総長吉武酒井両学士等亦同列車にあり。白河地方も同しく曇りしこととてとまりがけに

と出てし人々も皆此列車に打乗りしと見え空席ハ更なり立つも苦しきばかりに押入りたり。かゝる折から一刻も早く上野へ着けよかしと思ふ。浦和駅を過ぎ行くに田面に幾千となく螢乱れ飛ぶ。近きものハ流るゝか如く遠きものハ渦まぐ如し月なき夜に一しほの光をましてうつくしき限なし。再ひ見ん此如何かやと思ひて今ハ車の遅かれよかしと祈る。されと我身ハ間もなく上野に着く。このとき午後十一時十分なり家に入りしハ十二時を過ぎゝ。」

青 8 憲法発布式当日順序・賀憲法発布

明治22年(1889)2月11日
当日は、12時に皇居に集まり、憲法発布及び紀元節を祝い、16時に大学図書館前に集合し万歳を唱えた。その後一高生・大学生等は再び皇居に向かう。

青 9 帝国大学提灯行列次第

明治22年(1889)2月11日
19時から大学正門から皇居までの提灯行列が行われた。その道順のみならず、道中の作法や行列の順序などが細かく決められている。

青 10 憲法発布を祝う第一高等中学生写真

(駒場博物館蔵)

【夏目漱石との交友】

夏目 1 芳賀矢一端書

明治35年(1902)10月19日

倫敦留学中の夏目が神経衰弱に陥り、気が触れたという噂が流れた。それを菅虎雄や芳賀矢一が心配している様子がうかがえる。藤代禎輔とともに帰国命令が文部省から下されたことを知らせる端書。

「翻刻」

「電報の件ハ松井局長承諾いたし呉候。本日菅氏参られ承候へド夏目氏留守宅へハ両三月来一度も音信無之由弥以気がゝりの事に御座候右一寸御報迄。勿々

十月十八日

芳賀矢一

追而電報ハ藤代へ夏目同道せよとの文言二度座候」

夏目 2 『職員進退』 明治36年(1903)4月10日

ロンドン留学から帰った漱石は、第一高等学校校長狩野亨吉の周旋で同校の英語講師となる。年俸700円。東京帝国大学文科英文学科講師を兼任。(駒場博物館蔵)

「翻刻」

「明治36年4月10日付

夏目金之助・柴田桂太に授業囑託につき伺」

夏目 3 夏目金之助解囑願

明治40年(1907)3月31日

漱石は朝日新聞入社を決め、解囑願を第一高等学校長新渡戸稲造に提出した。(駒場博物館蔵)

夏目 4 卒業写真

明治38年(1905)7月

一部三年二組集合写真。最前列中央に狩野亨吉、左端に夏目漱石の姿が見える。(駒場博物館蔵)

夏目 5 夏目金之助端書

明治40年(1907)5月or6月

洋画家、満谷国四郎の水彩画に、夏目や大塚保治が文を寄せている。この間の書物とは、夏目が30円で購入していたと思われる Owen Jones の『Examples of Chinese Ornaments』である。

〔翻刻〕

「此間の書物は三十円には負けないよ 夏目」

夏目 6 未投函端書

明治40年(1907)4月頃

漱石の明治40年4月22日付書状に、「本郷のある書店に Owen Jones の Examples of Chinese Ornaments あり」とある。文中のものは、この書籍を差し、購入は希望しないと記している。

〔翻刻〕

「オーウェンジョーンスト之支那裝飾書ハ善

サソウナ者ナレト脱落アリテハ望ナシ」

夏目 7 日記

大正5年(1916)12月

夏目漱石の葬儀の様子を記した日記。狩野の弔辞には、病臥中の夏目に対する回復への希望と、それが叶わなかった落胆が表されている。

〔翻刻〕

「九日 朝夏目氏危篤ヲ報シ来ル正午見舞ニ至ル午後六時五十分終ニ卒此夜通夜ス

十日 午前八時帰宅昨夜玉川より封書来ル午後三時夏目ニ至ル夜十二時帰宅帰宅後岩波より弔辞ノ事申来ル

十一日 午後五時菅より電話にて弔辞ノ事ニ付申来ル六時夏目ニ至ル午前二時帰宅四時弔辞ヲ書了ル

謹ミテ夏目金之助君ノ霊ニ告ク我等交誼ヲ辱クセシモノ君病篤シト聞キ君ノ家ヲ問フ親シク親戚門人等ノ誠ヲ尽シテ君ニ奉侍スルヲ見テ尚一縷の望ヲ抱キ私ニ恢復ノ期アラシコトヲ祈レリ而シテ君遂ニ起タス命ナル哉今ヤ儀ヲ嚴ニシテ君ノ形骸ト訣ルルニ当リ恭シク君

柩ノ前ニ蹲キ謹ミテ哀悼ノ意ヲ表ス希クハ諒セヨ

大正五年十二月十二日 友人総代狩野亨吉

門人総代小宮豊隆弔辞ト共ニ棺ニ入ル、筈ニセリ」

【金沢の第四高等学校へ】

四高 1 第四高等学校教授辞令

明治25年(1892)7月16日

狩野は金沢にある第四高等学校の教授に任命された。当初は哲学、数学、天文の教員であった。

四高 2 依願免本官

明治27年(1894)3月30日

わずか2年で狩野は四高を辞任する。

四高 3 天文学

Notes on Elementary Astronomy, delivered during the

Session 1893~1894

明治26・27年(1893・1894)

狩野の講義ノート

四高 4 方程式論

明治26・27年(1893・1894)

狩野の講義ノート

四高 5 生徒学資補助扣出納簿

明治25年(1892)11月~明治27年(1894)4月

学費捻出に苦勞をした狩野は、生徒の授業料を補助するに力を惜しまなかった。八田三喜や国府長松(種徳・犀東)などとは、以後親交を深めていく。

四高6 茨木清次郎書状

明治26年(1893)9月1日

松本高等学校や東京女子師範学校、東京外国语学校、東京音楽学校などの校長を歴任した茨木清次郎も、四高通学当時は狩野から学資支援を受けていた手紙が残されている。

〔翻刻〕

「拝啓 時下漸秋冷之候ニ御座候処鳳堂益御機嫌能被為在御座恐悦至極ニ奉存候。扱而先日小生学費困難之為恐惶之至ニ御座候へ共非常之御難題を御請願奉仕候一件誠ニ忝くも御賢慮ニ預り候可き旨為仰出候段吉村殿より承り申実ニ々々始めて蘇生之思を仕り御厚恩之程難有奉感謝候。弊社一同何も御礼厚申上度由申聞候。尚々御補助を奉願度き金額等ハ委曲吉村殿ニ相談仕置候間同人より御報道申上候筈ニ御座候ニ付其節何分宜敷奉願上候。右は不取敢先つ御礼迄如斯自余御帰澤之上拝謁を得而御礼申上度候。頓首謹言

九月一日

茨木清次郎拝

亨吉殿侍史御中」

四高7 証

明治28年(1895)6月12日

学生に援助をしていた狩野は、決して裕福ではなく、平山などから借金をして、それらの費用を捻出していた。

〔翻刻〕

「証 一、金拾五円也。

右来ル明治二十八年七月卅一日マテ恩借仕候。

明治二十八年六月十二日

狩野亨吉

平山信殿」

四高8 平山信書状

明治28年(1895)9月4日

狩野は平山からの借金を無事、完済する。しかし、話に夢中になったあまり、うっかり平山は借り入れ証文を狩野に返却し忘れてしまう。本書状は、先の証文と共に郵送されてきたもの。

〔翻刻〕

「過日ハ態々御出被下結構なる物被下誠に難有く御礼申上候。其時遂々大切なる証書御返し申上候事失念いたし候事御免被下度願上候。今日乍失敬郵便にて右御届申上候。小生は今日一時天文台へ引移候間御序之節御来校被下度願上候。

九月四日

平山信

狩野亨吉様」

【熊本の第五高等学校へ】

五高1 第五高等学校教授辞令

明治31年(1898)1月22日

五高2 成績簿

狩野が常時携帯していた手帳。熊本で下宿していた「研屋支店」の見取り図が記されている。

また、学生の成績なども記されている。

五高3 狩野良知宛書状

明治31年(1898)1月23日

五高辞令が出された1月22日、狩野は金沢での諸経費精算のため、父親に50円の無心をする。夏目漱石から既に15円借りていたものの、諸方支払いには足りなかったためである。

〔翻刻〕

「本日後五時文部秘書官より任命相済候趣電報有之候ニ付明後日より学校へ出勤の積ニ御座候。右任命発表段々相後候為収支の予算全く相違ひ既に夏目より十五円借用候得とも是も残少々ニ相成又今月分月俸ハ製艦費等を引去れハ三十七八円より残り不申到底宿屋の払も致兼ねる次第に御座候。来月迄も宿屋二住居致候へハ金銭ニ差支出来不申候へとも畢竟は入費多く相成且私の位置ニ対し候ても宿屋住居ハ不似合と存候間可成早く立去度存候。唯是を実行致候ニハ此際五十円程を要候間もし御手元にて右金子相弁候ハ、何卒一時御給与被成下度来月月俸受取候節より月々五十円位ツ、差上御返済申上度候。銀行預金も相尽きかくる自由の事出来候ハずハ此地にて金策致申度これも行はれず候ハ、不得止来月も宿屋ニ居る事と仕へく候。右五十円出来申候ハ、何卒郵便為替にて御送被下度出来不申候ハ、至急電報にて其旨御通知被下度奉願候。尚申上度事

数々有之候得共右急用のみ申上他ハ次便ニ讓候。恐惶謹言

一月廿二日

亨吉

尊大人様膝下」

五高⁴ 澤柳政太郎書状

明治31年(1898)11月25日

狩野は予備門時代からの友人である澤柳から突然、一高校長の就任を告げられた。本来は内諾を得る手順であったが、「教育社会に最もいむべき運動」を予防するために、通達から着任まで一ヶ月未満という短さであった。前任者である澤柳は文部省普通学務局長に就任し、教育改革を行っていく。

【翻刻】

「拝啓 今回之事突然ニ起リ且大急更迭ノ必要アリ為メニ通常ノ道筋ヲ踏ムヲ得ス校長并ニ大兄ノ御承諾ヲ得ス小生ノ転任并ニ大兄ハ十目ノ視ル所第一高等学校長ニ最適任トノ決定当日即一昨廿二日決定候哉否直ニ上奏ノ手続ヲ踏マレ昨日御電報有之候モ最早尽力之余地無之茲ニ至リ申候。斯ク至急ヲ要シタル理由ハ教育社界ニ最忌ムヘキ運動ノ生スル道ヲ塞クタメニ有之若シ小子文部ヘ転任後一時無勤致居候ヘハ其間種々ノ運動起リ候ハ必定ニ有之為メニ右ノ如ク至急決定ヲ要セラレ候次第ニ有之決定ノ翌々日而モ祭日ヲ間ニ挟ミテ上

奏裁可相成發表相成候之モ御了解相成度奉願候。何卒校長ヘモ此書面相見セ被下小生より幾重ニモ御詫申上候次第御諒察相成候様御取計被下度即チ広ク教育界全体ノタメ今回ノ事ダケハ御忍相成度之ニ対スル御報ハ将来第五高等ノタメ上田及小生ハ素より大臣次官ニ於テモ致し候様可致候間御勘弁奉願候

御赴任ハ可成速ニ御願申上度候得共御地之御都合モ可有之目下当地ニハ差急キ用事ハ無之ト存候。来月三日ニ医学部卒業式有之候得共右ハ儀式的ニ出席スルマテニ候間同日マテは赴任相願候ヘハ無此上候得共御地之御都合ニテ或ハ後レ候トモ無抛ト存候尤大兄ノ後任者ニ就テハ次官及小生共兩人如何様ノ尽力モ奔走モ可致候得共大兄御上京ノ上御決定可然歟ト存候彼地御都合次第御赴任相待上居候。呉々モ中川校長ヘ可然御致声奉願候。草々頓首

廿四日

政太郎

狩野大兄」

五高⁵ 電報頼信紙

明治31年(1898)12月1日

狩野は五高から一高に転任する際にも、父親良知に借金 of 申し込みをしている。

【翻刻】

「キン一〇〇エンデンカワセダイ九ギンコウヨリウケトレ」

【東京の第一高等学校へ】

一高¹ 任第一高等学校長書状

明治31年(1898)11月24日

第一高等学校長辞令

一高² 明治35年卒業式式辞草案

明治35年(1902)

第8回卒業式の式辞草稿。

一高³ 端書

大正3年(1914)3月23日

岩波茂雄は、明治34年(1901)英法科文科入学。同期の石原謙などの寄せ書きには、岩波の無邪気な夢と、にっこり笑った狩野の似顔絵(阿部次郎筆か)があり、狩野は生徒に親しみを感じさせる校長であったことがわかる。

【翻刻】

「先生を金持にさせたい(岩波茂雄)」

一高⁴ 補永茂助書状

明治38年(1905)8月15日

補永は明治36年(1903)文科卒。森田米松(草平)と同期である。愛知県に帰省中、狩野の風貌を思い浮かべながら記された書簡である。学生に対し、嫌な顔一つせず、丁寧に接する狩野への熱い思いが伝わってくる。

〔翻刻〕

「肅啓 盛暑之候如何に御暮らし遊ばされ候哉。遙かに尊き御風丰を思ひ浮かへながら此の手紙を認め申候。先日は御多忙中をも弁へす甚た勝手失礼なる御訪問を申し上げしに御怒りも無く懇々と愉快に御はなし下されしのみならず御蔵書を拝借するの光栄を得加ふるに極めて興味ある書物を戴き誠に予想外にて奇異の想ひを為すことを禁じ得ず有り難くも亦実に恐縮仕候。生は品性の下劣なるが故にや己の尊敬する人と対話すること頗る心苦しく不本意乍ら何時も失禮にのみ傾き易く折々省みて自ら慨嘆致居候。竹早町の御邸を訪ひて御取次を願ふときはいつも躊躇致候。唯門を出つる時心欣然としていつも始めに躊躇せしことを悔い申候。右の如き腑甲斐無き奴に御座候へば失礼の節々は多からんとも何卒御容赦ありて御指導為し賜はらんこと幾重にも希望候。時節柄自愛ありて御養生專一に遊ばざる様祈上候先ハ先達の御礼旁暑中御見舞迄此の如くに御座候。惶々敬具

八月十五日

補永生

狩野恩師御座右」

一高 5 三矢宮松書状

明治36年(1903)9月28日

三矢は明治36年独法科独文学科卒。狩野は一高

卒業生にも、己の人脈を使い、学生の授業料軽減に力を尽くしていた。三矢は後に官僚となり、根津美術館館長(昭和16年9月〜昭和21年8月)となった人物である。

〔翻刻〕

「参上の上御話も御礼も申上度存候へ共御多忙の処却て御迷惑ニ被為有候はんかと存じ乍失礼書翰を以て申上候。金曜日の夜あれより直ニ澤柳氏ニ罷出候処御不在にて御目ニかゝりかね土曜日学校に参候処事務所よりも澤柳氏より招き来れりと申され放課後同氏御度ニ参り転じて文部省ニ参候へ共御不在にて其夜始めて御面会仕り学資補給(十円づつ)の人員に御撰択被下候旨拝承仕り其他一二の御注意をうけ誓書の書式を写して帰宅致し昨廿七朝誓書を認めて郵送候処夜ニ入て御受納の旨申来候。岩倉家の御志の感謝ニ堪へざるは申迄もなき程のことながらそのこゝに立ち至り候は全く先生の御厚情に基き候事にて実ニ感激ニ堪へ申さず候。今後は勿論努力に努力を加へ高誼に相悖らざるを勉め可申昨日の日記は左の語を以て終結致しおき候。岩倉家の高志ハ感ずるに余あり余幸ニ狩野先生の厚き推薦を得て菲才狂妄の質を以て其撰ニ当る。省みて自懼るゝと共に実に感激ニ堪へざるものあり。肅で此感謝の情意を将来に全うせんことを期す。始めて法科大学の教場ニ出で候時には其風趣何とな

く気に入らず同学の人々の様子を見るにも兎角に愉快を催し情緒再び乱れかゝり候ひしも決心を固めて取りかゝり候処追々多少の興味も感ぜられ正科以外にも一木教授の国法学をもきゝ居り申候。又時間の都合宜敷候間中島氏の論理及認識の時間にも出で申候。其他仏語をも学び始め候がラテン語は丁度時間の衝突にてきゝかね候。精力集中の策には有之間敷候へ共兎も角氣ニ入り候ことは矢張つゞけてやつて見度罷在候。兼て御話申上候三部二年岩崎栄二(改姓朝山)は近來益々氣質にかたより夏中大島ニ避暑致候まゝ今以て帰る心もなきものゝ如く生算実に困却罷在候。何とかして帰京は致さしむる筈ニ候が其中小生同道参堂可致候間可然御諭し被成下度今より御願申上置候。猶々時下折角御自愛被遊度先ツは御礼旁取思申述度如斯御座候。敬具

九月廿八日

宮松

狩野先生侍史」

【第一高等学校校長としての対応】

清国 1 狩野亨吉宛服部宇之吉書状

明治37年(1904)1月7日

北京の大学堂速成師範館の総教習として勤務していた服部から、日本へ留学する清国学生の日監督を狩野は引き受けた。

〔翻刻〕

「拝啓 然は今回当大学より派遣の留学生三十一名 内一名ハ已ニ日本ニ在リ の監督を文部大臣尊台に命ぜられしことと存候。此等学生は概一年間小生等の教育せし者 陳治安、王曾憲二名ハ小生等関係無き者に候 又此度派遣二付てハ大体の心得方等ハ懇ニ申含め置候も何分初めて外国に出づる支那人のことゆえ何かに付け御手数をかくること多からむと存じ候間、何分宜しく願上候。各人の修むべき専門学科ハ将来分科大学設立の時の必要と本人の希望とを参酌して定め候が種々の都合より人数預定よりも多く相成候ゆえ同一の学科に二三の学生を配当せるも有之、又別に十名の学生を英仏等に派遣候ゆえ某学科ハ此等の者に配当したるを以て日本留学生中にハ之を缺くも有之 例せば工応用化学電気工学の二科のみありて土木、機械等を缺けるハ英仏留学生中ニ之を配当せるが如し 科大学中 専門学科の変更ハ管学大臣の許可を得るにあらざれば之を許さざることに定め申候、又今回当大学留学生章程規定いたし候二付御参考として一部差出申候。此章程ハ張之洞と内田公使との間に交渉あり日本政府の承諾を得て定めたる留学生章程とハ半分別物なること勿論に有之候此大学留学生章程ハ小生の起稿せるものゆえ、若し右に關し御疑問の点も有之候はゞ、小生迄御申越被下度候。同章程中第五条に管学大臣より学生の入学すべき学校を指定することニ相成居候処今回ハ大臣より将来専門学科を修むる時に至

り入るべき分科大学等を指定したるのみにて高等学校の方ハ指定無之候が右ハ本年夏期に高等学校に進入すべき場合に至り預め貴臺と文部大臣との御相談により東京に何名其他の高等学校に何名と分配方法御定め相成り、当方に御申越被下候はゞ管学大臣ハ即其二より指定いたすべく候間、此点ハ預め御承知願上置候。又本年夏期に至る間の教育方法ハ貴臺にて文部大臣と御相談の上御ために相成りたる者を外務省を経て当方に御申越被下候様致度此も管学大臣と内田公使との間に話し合ひ済みに相成居候ものに御座候 此事ハ内田公使より外務大臣に申送りあることと存候 又学生にハ万々心得違ひ無きやう申含め置候も從來の支那留学生ハ往々監督者の真意と親切とを解せずして詰らぬ事ニ不平を鳴らすこと有之候間貴臺御監督の方法ハ成るべく詳細管学大臣に知らせ置くこと必要に有之候間外務省を経て公然御通知相成るものゝ外猶必要なる事柄ハ小生等まで御申聞け被下度願上候。又前記三十一名中普通学、日本語、英語等の学力ハ一様ならず候間、最初八ヶ月間の教育は半分組を分けて多少変通の法を取ることに必要と存候。本年春以来今日まで約八ヶ月間日本文（日本語にあらず）を毎日一時間ツ、必修課として課したるゆえ、普通の日本文ハ眼に見て意を解することを得るやうに相成居候。御参考までに入学以来今日までの毎月月次試験及学期試験の成績表添付致置候但別紙姓名学科表中姓名の上に○印

を附したるハ仕学館学生にて此ハ入学後算術の外にハ何等普通学科をも修めず専ら法律政治等の学科のみ修めたる者に候。別紙表中各人の姓名の上にその修めたる外国語を記入致置候。但日本の書を読むことハ皆一応出来申候間、此ハ別に記入いたさず候即別紙に日本語と記したるハ日本文とハ半分別物に候。其他の事ハ前回山川総長に送りたる書により御承知被下候ことと存候また委曲の点ハ章宗祥氏より御聞取被下度候原來小生自身送り行く積りの処学校授業上等の都合にて止むを得ず章氏をして送らしむることニ相成たる次第に候。先ハ右のみ。勿々

一月七日 服部宇之吉
狩野亨吉殿」

清国 2 京師大学堂官派外洋留学生章程

北京の高等教育機関である京師大学堂から官費で派遣された留学生の心得書

清国 3 清国京師大学堂派定留学生二関スル書類

清国から提出された留学生の進路希望と、定期試験成績。

清国 4 清国京師大学堂留学生二関スル第一

年次報告書

明治38年(1905)1月

第一高等学校がまとめた清国留学生の報告書。一高用野線がある用紙が用いられている。

清国 5 清国京師大学堂留学生二関スル第二
年次報告書 明治 39 年(1906)1 月

鳩山 1 通学御届(通学御願)

明治 33 年(1900)7 月 27 日・8 月 21 日
鳩山 一郎の通学願書。7 月 27 日に「通学御届」として提出されたが、通学が決定事項ではない為「通学御願」と訂正し、8 月 21 日に再提出されている。結局 一郎は、一旦入寮し、退寮するという手続きを踏んだらしい。

〔翻刻〕

「通学御届願 東京小石川区音羽町七丁目十番地 鳩山 一郎

右は今般御校入学御許可相成候ニ付而は家庭に於而智育德育体育共充分監督致し殊に品性の修養に相勉め可申ニ付家庭より通学為事御許可致被度候間此段御届願申上候也。

東京小石川区音羽町七丁目十番地証人 鳩山和夫 明治卅三年七月二十七日 八月二十一日 小石川区小日向水道端二丁目三十二番地 副保証人 鈴木喜三郎

第一高等学校々長 狩野亨吉殿 願書写」

鳩山 2 鳩山和夫書状

明治 33 年(1900)8 月 31 日
鳩山 一郎の通学許可願を 10 日間ほど放置していた狩野に対し、父和夫は政治的圧力をかけて、

裁許を迫った。奥田義人は、同年 5 月 20 日に文部次官から文部総務長官となった人物。

〔翻刻〕

「拝啓 愈々御清康奉賀候。陳は鳩山 一郎義高等学校へ入学許可相成候処寄宿セズ家庭より通学許可相成度旨本月(二十日又ハ二十一日頃)願書差出置候。然ルニ最早時期切迫致候ニ付準備之都合も有之候ニ付此際可成速ニ願意採否御決定被降度希望之至ニ□□候。本願書ハ奥田次官トモ勿談之上差出候モノニ有之候間単ニ普通の例規ニ背クトノ理由ノミニテ決セラレサル様特ニ御評論願度此段申添候。勿々頓首 三十三年八月卅日 鳩山和夫 狩野亨吉殿」

「通学御届願 東京小石川区音羽町七丁目十番地 鳩山 一郎

鳩山 3 寄宿寮記録 明治 26・34 年(1893・1901)

通学許可の採扱は、校長ではなく、寮務舎監・委員に一任されていた。改めて協議されたという事から、狩野は多少なりとも鳩山 一郎の自宅通学を是認していたようである。

鳩山 4 鳩山春子書状

明治 35 年(1902)3 月 16 日
一郎の弟、秀夫の入寮問題について、母親春子からの手紙。入寮を拒否したために、酷いイジメを受けるのではないか、という不安が綴られている。英法科に在籍していた秀夫は、制裁不

安を抱えつつも、三年間首席を通した。

〔翻刻〕

「此手紙学生間ニ御知らせ被下候時は秀夫又々一層烈敷攻撃されべく候へはこれハ内々に致度候私もこれハ同人ニ知らせず私認め申候。入寮一件カ斯く迄生徒の頭腦を悩まし候事実ニ驚之外無之候

拝啓 其後は久敷御面晤を得ず候得共益御多祥奉大賀候。陳は次男秀夫寄宿致さざる義ニ付非常ニやかましく既ニ先日惣代会ニ於而制裁云々と迄申出し候者有之候様子ニ而友人より心配致したる注告も有之秀夫義も非常ニ苦慮致し今の俥ニ而捨て置き候へハナガラハとか其他の制裁(乱暴を受くるも計り難く)を蒙り可申又切角注告致し呉れ候友人の親切も無にする義とて本人も心配の余り大ニ発熱いたし居候。然るに此度ハ長男の場合と異なり一度入寮致し候時ハ三年間ニ渡り候由秀夫の如き胃弱の者は中年の頃ニ如何なる害を蒙り候も難計それのみならず幼年より兄弟共ニ寢食を共ニし殆と一身の如く致し置き候ものを三年も分け候時は双方ニ取り非常ニ不便ニ而私も実ニ悲く両人の子供を捨て、敵手ニ渡す如き心地致候。これハ長男の場合より遙かに校則退歩し益々私共の如き親を苦しめられ自分の欲する如き教育を施し得ざらしむる義と考へられ失望落胆之至ニ存候。長男の時よりも退歩して

三年間の入寮を事実の上ニ余義なくせらるゝ
替りニせめてハ此学期丈けニ何とか御取計の
工夫は無く候や。尤も他生徒を激せむ候時は実
ニ私方大切なる子供の危険を惹起し候如きあ
りてハ一層困却致候得共余り残念ニ而これな
りニ閉口いたし難く為めニ内々私より一言御
伺ひよき御指図をも仰き度と右私忝了見ニ而
懇願仕候情迫り筆廻らす乱筆欠礼の段御免し
被下度此段願上奉り候。勿々敬具

三月十六日

和夫代鳩山春子

狩野亨吉様

如何なる不便を蒙るも不具ニ致したり又ハ学
生間ニ悪評せられて常ニ不愉快ニ而学校を楽
しまさる如きありてハ精神上少なからざる有
害ニ候得ば子供の将来の幸福を犠牲ニ致すよ
り他ニ方法無之実ニ嘆かわしき極と深く世の
不便を憂へ候次第有之候」

鳩山 5 「文学博士 狩野亨吉氏」(千栄木仙史編

『学界文壇時代之新人』天地堂、明治 41

年(1908)

鳩山 6 鳩山 一郎「私の履歴書」(『私の履歴書』第

7 集、日本経済新聞社、昭和 38 年(1963)

鳩山 一郎自身は、入寮拒否が母親の考えから出
たものであると記している。なお、一郎は 1、
2 ヶ月の入寮で済んだという。

藤村 1 蘆野敬三郎書状

明治 36 年(1903)5 月 24 日

藤村の自殺については、父方の叔父である那珂
通世の追悼文が有名だが、母方の伯父である蘆
野から狩野に憔悴した手紙が送られている。芦
野と狩野は、大学の同期である。

〔翻刻〕

「拝啓 予テ学校ノ方ニテ御配慮被下候愚甥
藤村操事廿一日ヨリ家出致し居手蔓ヲ逐ヒ搜
索ノ結果華厳滝ヘ投身ノ事ニ判明致誠ニ面目
無之次第第二御座候。小生拝趨□□ノ御礼旁御報
告申度候処其前ヨリ病臥致居如何トモ致兼候。
当人同窓親友北島葭江君ニ託シ右申上度且前
後ノ事情詳細陳述為致候。直右御聞取被下度候。
遺体ハ今日搜索中ニ御座候□□乱筆御容赦願
上候。頓首

五月廿四日

敬三郎

狩野賢台机下」

藤村 2 蘆野敬三郎書状

明治 36 年(1903)7 月 10 日

「巖頭之感」を残し、瀑布に身を投じた藤村の
行方は杳として知れなかった。約 2 ヶ月後に発
見された遺骸は、青山墓地に埋葬された。

〔翻刻〕

「拝啓 藤村操ノ儀ニ付毎々御配慮被下奉深

謝候。今般遺骸発見ニ付来十二日一時青山へ葬
送ノ事ニ取計申候。又々持病ニテ引籠居候ニ付
安倍生差上候。萬御聞取被下度候。勿々

狩野大兄座右

蘆野拝

遂テ届書ノ件モ可然御指図願上候」

藤村 3 安倍能成「藤村操君を憶ふ」

(『校友会雑誌』第 128 号、明治 36 年(1903)5 月)

『校友会雑誌』に藤村操を偲ぶ特集が組まれた。
一年も通わなかった一高だが、友人は多く、後
に校長になる安倍も追悼文を寄せている。長身
ながら穏やかな風貌の藤村は、将来哲学を学び
たいという希望を口にしていたという。安倍は
後に藤村の妹と結婚する。

藤村 4 魚住影雄「自殺論」(『校友会雑誌』

第 137 号、明治 37 年(1904)5 月)

狩野は、『校友会雑誌』配布前に、自殺を讃美し
た部分を墨で塗りつぶさせた。

藤村 5 『第一高等学校一覽』

明治 35 年(1904)12 月調

藤村操は明治 35 年 9 月に入学し、英法科文科
1 年 2 組であった。同じクラスには、「銀の匙」
の作者、中勘助や一高の校長となった安倍能成
がいた。

【京都の帝国大学へ】

京1 京都帝国大学文科大学教授辞令

明治39年(1906)7月5日

狩野は文科学長として、倫理学を受け持った。

京2 授業方法・教養ノ方針

狩野は、京都大学文科学長として、東京大学との差別化を図り、単位修得方法や実学志向の教養などを提案している。

〔翻刻〕

「授業方法 哲学科ニ於ケルト同シク正科目ノ授業ヲ普通講義特殊講義及演習ニツツ普通講義ハ学生一般ニ聴カシ候。特殊講義及演習ハ専攻科目ニヨリ定ム学年ニ応シテ講義ヲ配当スルニハ普通ハ第一学年ト第二学年トニ配分シ特殊ハ第二学年以後トス。演習ハ第三学年ニ入ル。是故第一学年ト第二学年ニ於テハ各専攻科ノモノ大概同シ課業ヲ修メ三年ニ至リ全ク専攻トナル是東京ト異ナル所也

教育ノ方針ニツキテモ東京ニ異ナル所有。從來ハ単ニ学者ト教員ヲ作ルヲ以テ目的トシタルモ我学ハ此ヲ作ルト同時ニ又広ク社会ノ各方面ニ活動シ得ン者ヲモ作り出サントノ考ナリ由ヲ正科目ニモ特ニ最近世史ノ一科ヲ独立セシメ副科中法律政治財政経済其他ノ近世語学等ヲ加ヘ實際社会ニ立チテ活動□ヲ加ヘ其準

備ヲナサレタルコトトシタリ」

京3 国府種徳書状 明治33年(1900)4月12日

明治33年4月1日『万朝報』を退職した内藤と国府は、中学校かどこかの講師にでもなろうかという思いがあった。狩野に就職の斡旋を頼んだこの手紙が、内藤の招聘へとつながっていく。

〔翻刻〕

「肅啓 其後は御無沙汰許致居候。陳は小生本月一日内藤氏と共に萬朝報を退候。当分何か小冊子でも著述して日を送らんとは有之候得共何れかの中学校あたりへ講師致度存居候。日本中学校などには教師を求め居候由に御座候か。乍御手数杉浦氏へ御聞合はせ御推薦被下候様願上候。其他の中学校などにも講師を要する箇所は有之こと、信一二箇所御推薦被下度願上候。先は御願用まで如此御座候。不聲
四月十二日 種徳
狩野先生侍史」

京4 内藤虎次郎書状

明治35年(1902)1月4日

内藤は狩野から一高教授の口を紹介されたものの、新聞記者としての責任感から、「大阪朝日新聞」を辞められず、結局一高就任は流れた。

〔翻刻〕

「恭賀新禧 明治卅五年一月 内藤虎次郎

狩野亨吉様

副啓 去臘拝眉之節ハ深切ノ御盛意感謝難堪候。其後国府氏ヲ以て被仰下候。毎々御厚情一々肝ニ銘じ候。今日ヲ以テ播州舞子滞在中なる社長村山氏ニあて事情詳細陳述辞意申演遣はし候。数日内ニハ決定に仕見込ニ御座候。但し目下或る事件の為当地ニ於ける唯一の商売敵たる大阪毎日新聞と両方の神戸附録之事ニ関し論戦開始中ニ有之その結局ハ事ニよれば月末位までかゝるやも不測小生ハ其の攻撃主任ニ当り居候義故中途にして身ヲ引き候事或は新聞社の非常なる迷惑となるやうなればその論戦間丈上京猶予ヲ願仕置べからざるやも難計と存候。尤も此義ニ就ても村山氏の意見尋ね遣わし居候間いづれ同氏意見定まり次第重ねて可申上候へども右の事情ハ含み迄前以て如此申上置候義ニ御座候。尚此方決定早速可申上候。不遠拝眉之節御礼可申上候。頓首再拝
一月四日

尚内閣銓衡云々の事ニ関してハ奥田法制局長官ノ意向ヲ確むる必要有之候ハゞ当地中橋徳五郎氏も声援ヲ与ヘ可申旨申居られ候。それらの都合ハ如何のものに有之候や。国府氏までなりともおもしろし置願上候」

京5 谷本富・松本文三郎宛狩野亨吉書状

明治40年(1907)10月19日

打開策として、講師採用の後、しかるべき論文を受領してから本官に昇進させるのが、最善であらうと提案され、狩野も了承した。

〔翻刻〕

「拝啓 一昨日は好天気学友会茸狩の盛況思やられ候。小生同夜終列車ニ而東上昨日午后着京致候。今日澤柳よりかの内藤の件ニ関し問合せ置きたる二ヶ条の返事を得候。孰れも差支なしとの事ニ有之御安心被下度候。此上は早速囑託の運びを取る事ニ致度石川書記官及び伊津野書記官ニ当テ至急其手続を致候呉るゝ様申遣候。此件ニ就き当初より少からず諸君の御心配を煩候事全く小生不行届の致す処ニ有之偏ニ御寛恕を乞ふ外無之候。先ハ不取敢右御報まで如此御座候。一同諸君へハ何卒御両兄より可然御伝被成下度奉願候。謹言

十月十九日

狩野亨吉

谷本富様

松本文三郎様

京6 退官願

明治40年(1907)10月8日

狩野は京都大学も、2年間で退職する。この退官願が提出された約一年後に受理され、以後、鑑定を主な糧としながら生きていく。

〔翻刻〕「退官願本官儀病氣ニ罹リ何分任務ニ堪へ難ク候ニ付当職被免度此談奉願候也」

蒐書

〔狩野の蒐書目録〕

蒐書Ⅰ-1 『蔵書目録』仁義礼智信

明治30年(1897)以前の蒐書を主とするが、31年以降の蒐書も若干含む。「仁」の分類項目は「哲学・経子・宗教・教育・政学・法学・兵学・雑説」。「藤岡由蔵日記」は「智」歴史に掲載。12月に第五高等学校教頭就任を決めた明治30年は狩野の転機の年。

蒐書Ⅰ-2 『書籍目録明治三十一年以降追加之部』表紙の「狩野氏図書記」が狩野の蔵書印。

蒐書Ⅰ-3 『狩野氏蔵書と漢書名細目録』

明治四十年現在(稿)』

第五高等学校教頭就任以後、いわば定職についたせいか、明治30年代の蔵書の増加振りは瞠目に値する。10月に内藤湖南の招聘が決着し、京都帝国大学に辞表を提出した明治40年(1907)は狩野の大転機の年。

蒐書Ⅰ-4 『狩野氏蔵書と漢書名細目録索引』

〔狩野の功績 関孝和、志筑忠雄、安藤昌益〕

蒐書Ⅱ-1 狩野亨吉「記憶すべき関流の数学家」

『本朝数学通俗講演集』大日本図書、

明治41年(1908)3月

関孝和二百年忌記念の本朝数学通俗講演会での講演。明治17年(1884)12月25日のニュートン祭における酒井佐保の講演で狩野は初めて関を知り、以来、和算書・暦書の蒐集に努め、中根元圭・本多利明といった関流の天文学者・数学者の存在を明らかにした。

蒐書Ⅱ-2 狩野亨吉「志筑忠雄の星気説」

(『東洋学芸雑誌』東洋学芸社、

明治28年(1895)6月号)

志筑は長崎の阿蘭陀稽古通詞で蘭語の天才。志筑の『暦象新書』はケイルの天文学入門書の蘭訳本の翻訳。附録の「混沌分判図説」が、カン・ラプラスの太陽系成因に関する星雲説と類似していることを狩野が初めて指摘。志筑は「鎖国論」の翻訳者としても有名。

蒐書Ⅱ-3 狩野亨吉「安藤昌益」(『世界思潮』

第3冊、岩波書店、昭和3年(1928)5月)

明治32年(1899)頃に狩野は『自然真営道』を入手して、徹底的な平等主義を特色とする安藤昌益の特異な思想を明らかにした。『自然真営道』は天下の孤本だけに、昌益発掘は狩野最大の功績といつてよい。

蒐書Ⅱ-4 安藤昌益『自然真営道』

大正12年(1923)春、狩野は秘蔵してきた『自然

真嘗道』と『藤岡由蔵日記』を各種の暦とともに東京帝国大学図書館に売却したが、図書館の有に帰する前に史料編纂掛事務主任三上参次に貸し出されていた『自然真嘗道』12冊を除き、すべて関東大震災で灰燼に帰した。

(東京大学総合図書館蔵)

【蒐書の貸与と活用 理系】

蒐書Ⅲ-1 田中稻城書状

明治28年(1895)6月14日

東京図書館(現国立国会図書館)館長田中が和算書目録編纂にあたって意見を徴したことは、狩野が和算書蒐集で名があったことを物語る。6月16日に館員が来訪、19日に狩野が図書館を訪れ、9月3日に『和漢圖書分類目録 數學之部・理學之部』3冊が届いた。

【翻刻】

「拝啓 薄暑ノ候愈御清適可被在下奉賀候。然ハ甚乍突然此度図書館ニ於テ和算書目録編纂ニ付、御示教ヲ受ケ度儀其向ノ者参堂為致度ト奉存候処、御許可可被成下哉。自然御差支無之候ハ、御都合ノ日時午御手数数別紙端書ニテ御一報被成下様願上候。先ハ如此候。頓首

六月十四日

上野図書館ニテ田中生

狩野老兄砌下」

蒐書Ⅲ-2 澤田吾一和算書借用証

明治34年(1901)

澤田は狩野の旧友。明治24年(1891)東京帝国大学理科物理学科卒。数学の教科書多数を著す。東京高等商業学校(現一橋大学)退官後、大正9年(1920)東京帝国大学文学部国史学科入学。卒業後の大著『奈良町時代民政経済の数的研究』(富山房、昭和2年)は名著。

蒐書Ⅲ-3 遠藤利貞書状

7月11日

遠藤は明治29年(1896)に『大日本数学史』を著した和算史家。発信地が学士院なので、囑託として和算書の蒐集・調査に従事する明治39年以降の公用による蔵書の借用。むろん私用でも借りており、明治34年(1901)改や明治45年(1912)5月以降の貸出簿にその名が見える。

【翻刻】

「益御吉祥奉大祝候。毎度参上御邪魔仕り奉多謝候。陳は過日拝借之御蔵書三十三部三十七冊別紙目録之通り御返納仕候。御調査之(上)御落手可被下候。就テハ過日御願申上タル御書二十八冊及一葉拝借仕度此者へ御渡し候様奉願上候。余は拝眉之時ニ讓候也。早々敬具

七月十一日

利貞拝

狩野様机下」

蒐書Ⅲ-4 三上義夫書状

明治42年(1909)11月20日

三上は『文化史上より見たる日本の数学』(大正12年)を著した和算史家。明治41年から大正3年まで帝国学士院囑託。狩野に師事したが、遠藤利貞とは反目。書中の『測円海鏡』は中国元代の天元術書、菊池先生は院長菊池大麓、『円理綴術』は建部賢弘の和算書。

【翻刻】

「拝啓 先達ては罷出御邪魔仕候処、種々有益なる御談話を承り大に利益致候事呉々も感謝の至りに候。

其節御話し有之候測円海鏡につきては何れ機を得て充分取調可申候間、宜しく御尽力願上候。先生の御研究有之候志筑の星気説の前身とも申すべき和漢の天地創造説につき一通り記述致度存居候。着手の上は御示教に預り度期待罷在候。

先日來菊池先生の同意を得て、円理綴術の反訳を試み候処、算式など如何にしたらば理解し得べきやうに訳出され候やら善き考へも浮び不申、書き直して許り居候、進行は少しもせず候。ブルーネット、アルシーフの別刷御送申度候、御笑覧被下度候、公にする積りにて起草したるものには無之候もカントル先生より同雜誌上に出だし呉れたれたるやらの事に候。追々寒さにも向ひ候間何分御用心專一に祈上候。草々

十一月二十日

三上義夫

狩野先生侍史

菟書Ⅲ-5 平山信宛書状草稿

明治43年(1910)1月

ハレー彗星出現前年の明治42年11月の日本天文学会講演で東京帝国大学助教授平山清次は、最近3回(1682年・1759年・1835年)の記録が日本にないのは光度減少の証と話した。狩野はこれを東京天文台の平山信から聞き、早速、蔵書を調べて当該記録を探し出した。

【翻刻】

「旧臘御話ノアリシハレーノ彗星出現ノ事ニツキ調ヘタル所ヲ御知ラセ申上候。

千六百七年ノ出現

(徳川実記)慶長十二年七月廿五日西方ニ彗星アラハル

(武江年表)同八月八日客星現トアリ最卑通過ハ九月七日ナレハ、七月末ニ見エタルハ少シ早過キル様ナレト、別星ナラズト思ハレ候。実記ハ当代記ヲ引ケルモノニテ信用スヘキハ勿論ナリ。武江年表ハ何ニ原キシカ審ナラズ。大日本史料ニハドチラモ抜カシタリ。物足ラヌ心地ス千六百八十二年ノ出現

(本朝天文志)天和二年八月四日彗星見西踰日消千七百五十九年ノ出現

(本朝天文志)宝暦九年二月朔夜見孛星于虚危間

歷十四五夜消滅

右二條ハハレーノ彗星ヲ指セル事疑ナク、殊ニ宝暦ノ記事ハ天文志ノ著者西村遠里カ目撃シタル所ヲ記シタルモノト思ハレ、面白ク感セラレ候。

千八百三十五年ノ出現

最初カノ古今彗星志(小生ノ所ニヨリセマデアリ)同補遺(ミニアリ)等ヲ通覧シタレトモ此出現ノ事ニ言及セズ。又寛政以後ノ渋川観測録ヲ丁寧ニ調べタレト見エス。手近ノ年表等ニモ見当ラス。サレハ現存ノ古老ニタバスヨリ外ナカルベシト頗ル失望致来候処、今日幸ニ此上ナキ材料ヲ見出申候。

新修彗星法(渋川景佑編トアリテ蘭書ノ翻譯ヨリ成ル者ト認ム)主編者自身ト足立信頭トカ別々ニハレーノ彗星出現ヲ予報シタル結果ト当時実測ノ結果トカ对照シテ載セサレトエクセントリンチー最高距及ヒ周期ヲ除シタル外ノ諸応数ト左表ノ如クナリ居レリ

足立信頭実測推算

ハレー彗星測算ノ細草ヲ載セ、著者自身ト足立信頭トノ見出シタル諸応数ヲ別々ニ記載セリ。足立信頭
渋川景佑」

菟書Ⅲ-6 平山信書状

明治43年(1910)1月20日

平山信は、狩野の調査により760年と1301年を

除き日本の記録は出揃ったと喜んだ。狩野の調査に驚いた平山清次は、講演筆録を訂正、史料編纂掛から史料転写の許可を得ると同時に狩野の蔵書を借覧し、結果を『天文月報』第3巻2号(明治43年5月)に発表した。

【翻刻】

「只今華墨拝読、直ニ平山清次氏ニ見セ候処、同氏モ最近ノ分ニハ大ニ驚カレ候。同氏ハ過日天文学会ニテナセシ講演ニ近頃本邦ニテハリー彗星ヲ発見シ得サルハ其光度減少ノ証ト申サレ候ニツキ、右講演集出版(不日)ノ切ニハ貴兄御発見ノ事実ヲ記シテ右ヲ訂正致度由申居候間、何卒御許容被下度願上候、右御発見ニヨリ本邦ニ於ケルハリー彗星ノ記録ハ

760 VII 10 Perihelion Passage

1301 VIII 23 "

ヲノゾク外凡テ完成致ス事ニ相成候由ニツキ右モ御序ノ節御調被下度願上候、先ハ不取敢御礼申上度如斯ニ御座候。草々

廿日

平山信

狩野亨吉君座下」

【菟書の貸与と活用 文系】

菟書Ⅳ-1 古写本延年写『史記』他領収書

明治39年(1906)7月3日

延年5年(1073)に大江家国が書写し、訓点を付した『史記』は全130巻中3巻が伝存。売ったの

は鬼斎藤こと琳瑯閣初代兼蔵。客の顔を見て本の値をつけるので虫が好かなかったが、よい本が出るのでいやでも行かなければならなかったと狩野は述懐している。

蒐書Ⅳ-2 延久本『史記』孝文本紀借用書

明治40年(1907)9月1日

国語調査委員会補助委員の大矢透が、古訓点調査のため借用した。明治35年に文部省に設置された国語調査委員会の委員には上田萬年・澤柳政太郎・芳賀矢一・三上参次など狩野の旧友が顔を揃えており、大矢は紹介状を持参したはずであるが、伝わらない。

〔翻刻〕

〔証〕

一 延久五年写史記孝文本紀第十 卷子本
右古訓点調査上必要有之、拝借仕候也

明治四十年九月一日

国語調査会補助委員 大矢透

狩野亨吉殿

蒐書Ⅳ-3 「史記 孝文本紀」(『仮名遣及仮名字

体沿革史料』国定教科書共同販売所、

明治42年(1909)

大矢透は国語調査委員会補助委員として仮名遣と仮名字体の沿革を調べるため各地に出張して採訪した史料から最も時代の徴証となる

べき50部を選び、その摘要を公表した。「概説」を見ると、孝文本紀は狩谷求古楼(掖斎)から柏木正矩(貨一郎)を経て狩野に伝わった。

蒐書Ⅳ-4 和田萬吉書状

大正5年(1916)11月10日

狩野は旧友の東京帝国大学図書館長和田から大蒐書家和田維四郎の援助の下に青本・黒本類の書史的研究に従事する千秋季隆の蔵書閲覧を依頼された。青本・黒本は江戸時代刊行の草双紙の一種。千秋は東京帝国大学国文学部卒、研究は未完に終わったらしい。

〔翻刻〕

「拝啓 其後ハ御疎狀申上候処、益御安祥奉扑喜候。諸甚唐突ナカラ文学士千秋季隆男先般来和田維四郎君援助ノ下ニ青本黒本類ノ書史的研究ニ従事中ニ有之、既ニ和田(維)本、東大本、帝国図書館本、加賀(豊三郎氏)本等ニツキ対照調査ヲ略了被致候ニ就而ハ、此上追々前記以外ノ集書家歴訪ノ援助ヲ仰クコトニ相成候処、貴下御旧蔵該本ノ目六尊館ニ就テ一応拝覧ヲ遂度趣切望御座候テ、右情願小生ヨリ紹介申上呉ヨトノ事ニ有之候。何卒御快諾ノ上同氏参上ノ時日御垂示ニ預り度、乍自由御依頼迄如此御座候。草々再拝

十一月九日 和田萬吉

「狩野賢台侍史」

蒐書Ⅳ-5 三上参次書状

明治43年(1910)4月4日

東京帝国大学史料編纂掛事務主任三上は、『大日本史料』第12編慶長19年9月21日條「この頃、操及び浄瑠璃、三味線頗行はる、是日、院御所に操御覧あり」の参考のため浄瑠璃シラミ本等の閲覧を旧友の狩野に求めた。シラミ本は江戸時代前期刊行の絵入り浄瑠璃本。

〔翻刻〕

「史第参五号

本掛ニ於テ編纂出版中ノ大日本史料第十二編ノ中慶長十九年ニあやつり流行ノ條有之、全條ニ参考ノ為メ浄瑠璃シラミ本等拝見致度候。就テハ掛員石川巖差出候間、閲覧方御取計相成候様致度此段及御依頼候也

明治四十三年四月四日

東京帝国大学国文学部

史料編纂掛事務主任

史料編纂官文学博士 三上参次

文学博士狩野亨吉殿

蒐書Ⅳ-6 石川謙端書 大正6年(1917)12月10日

後に近世教育史の研究で名をなす石川は、寺子屋教科書・往来物研究のため岡村金太郎を訪れ、狩野が当該版本を多数所蔵すると聞いて紹介状をもらい、都合を問い合わせた。岡村は狩野の旧友、明治22年(1889)東京帝国大学理科大

学植物学科卒業の水産学者。

〔翻刻〕

「拝啓 寒さ漸々厳しく相成候折柄愈々御隆盛の趣拝承、慶賀の至に奉存候。陳は過日来徳川時代の寺子屋教科書並に往來物研究の爲め二三度理学博士岡村金太郎先生を御訪問申上候処、其の際先生が此の種の版本多数御所蔵遊はされ候旨御話有之、御尋ね申上げよとて御紹介状を賜はり申し候。就而は何日頃御伺ひ申上げ候はゞ御拝眉の栄を賜はるべく候や、御都合御洩し被下度御願申上候。敬具」

『藤岡屋由蔵日記』原本や書入本の活用』

菟書V-1 『書籍借出氏名録』

明治廿七年五月以後』

冒頭に肩を並べるのは小屋保治と夏目漱石。小屋は狩野と同期、明治24年(1891)哲学科卒、明治28年大塚楠緒子と結婚、大塚に改姓。夏目は明治26年英文学科卒、明治43年の楠緒子の死に際し「あるほどの菊投げ入れよ棺の中」という句を詠んだことは有名。

菟書V-2 『明治廿四年改 書籍貸出扣簿』

平出鏗二郎が借りた『藤岡由蔵日記』は、神田御成道の古本屋須藤由蔵の日記で、藤岡は屋号、幕末江戸の広汎な情報を記す。全185冊。文行堂初代横尾卯之助から購入。明治34年(1901)6

月の緒言のある抄写本『天言筆記』を作った飯島半十郎の名は見当たらない。

菟書V-3 平出鏗二郎書状

明治34年(1901)9月30日

東京帝国大学文科大学史料編纂員の平出が借りたのは『藤岡由蔵日記』と「敵討番附」。近世風俗に精通する平出が日記を借りるのは当然としても、番附は翌年11月に史学会で「敵討」と題して講演するため下調べをしていたからだろう。狩野同様、終生、独身。

〔翻刻〕

「拝呈 過日ハ夕景参上いたし失礼仕候。さて拝借申上候日記之儀、両三日の打と申上候て遅引いたし候段御海容ニ預り度、以御蔭大体語り仕候。但し前記(四拾六)及ヒ天保二・五年の分(九)三冊及敵討番附抄写致度條有之候間、猶両三日拝借いたし置度奉存候。乍御迷惑次之分何冊にもよろしく候間、御都合ニまかせ拝借いたし度、此者ニ御渡し被下候へバ愈幸之事ニ有之候。何分よろしく偏ニ奉願上候。余ハ拝眉之上万々御礼可申上候也。草々頓首

九月三十日

平出鏗二郎

狩野様侍史」

菟書V-4 朝倉亀三(無声)端書

大正4年(1915)3月12日

朝倉は近世の文芸史・風俗史家。『新燕石十種』に『藤岡由蔵日記』から流言・落首を抜萃した『天言筆記』を載せたが、狩野から日記を借りて対照し、大いに誤りのあることを知り、抄録をそのまま日記として引用して後世の笑い草となることを免れたと喜んだ。

〔翻刻〕

「拝呈 昨日ハ参堂之節珍籍奇書に目を驚かし思はず長咄失礼仕候。其節拝借之藤岡屋日記今朝天言筆記(飯嶋氏抄録)と対照候処、天言筆記の巻頭に文政八年三月十八日家斉公太政大臣云々の記事あり。然るに原本の日記にハ無之、不思議に存取調候処、家斉公之任官ハ文政十年にて原本にハ文政十年の條に有之候。これハ小生など抄録する節ハ先つ巻数と年月を書し、然ル後に本文を写す事に候が、飯嶋氏ハ先づ本文を写し、後年号加へられ候により、かく誤有之候事と存候。其他誤脱大に発見、殊に文章ハ飯嶋氏の筆になり原本の面影無之、されバ原本を拝借せずして抄録を其まゝ藤岡屋日記として引用せば、後の世の御笑ひ草となる処を原本を借得たるハ実に嬉しき極みに御座候。御礼迄」

菟書V-5 朝倉亀三(無声)端書

大正7年(1918)1月6日

朝倉は再度『藤岡由蔵日記』を借り、全巻に目を通した。没後出版の『見世物研究』(春陽堂、

昭和3年)で名があるが、国書刊行会の翻刻出版事業に協力、『新燕石十種』などを刊行、『国書刊行会出版目録』(明治42年)に附録として「日本古刻書史」を寄せる。

〔翻刻〕

「拝啓、御多忙中毎々にて申上兼候へども、兼て拝借之藤岡屋日記二十冊明後日返璧之為使差上候間、

第六十五より八十四に至る廿冊

又々拝借仕度、御取出之上使へ御渡し被下度奉懇願候。御不在にてもわかり候様何卒御願申上候。正月六日」

菟書V-6 展覧会出品物保管証

大正9年(1920)2月17日

狩野が東京府民政史料展覧会に出品した一つが『藤岡屋由蔵日記』。3年後この日記は『自然真営道』とともに東京帝国大学図書館に売却され、関東大震災で灰燼に帰すが、幸いにも東京市史編纂室による写本が伝存する。東京都公文書館蔵。全152冊。

〔翻刻〕

〔乙第号 保管証

○軍幟図 二冊 近世百物語 二冊

○藤岡屋由蔵日記 五冊

右東京府民政史料展覧会出品物トシテ鄭重ニ保管致シ、用済ノ上ハ直ニ返戻可致候也

大正九年二月一七日

東京府内務部長 岩田衛

右紹介者 狩野亨吉殿」

菟書V-7 『狩野家圖書貸出簿

明治四十年五月以降』

明治40年(1907)9月11日に『女諸礼集大全』『女用文章』『女式目』など7部28冊を借りた須藤求馬は、第四高等中学校と第五高等学校の同僚。女性に関わる著作として『日本女史』(松邑三松堂他、明治34年)と『実用女手紙』(西東書房、明治41・42年)がある。

菟書V-8 大村西厓書状

明治45年(1912)2月22日

大西は高楠順次郎、望月信亨とともに日本撰述の仏書の刊行を企て、仏書刊行会を設立、明治45年から大正11年(1922)までに『大日本仏教全書』全161冊を刊行。この時、大西が借りたのは、狩野の貸出簿によれば、聖徳太子伝暦の古写本と南畝書入本。

〔翻刻〕

「拝啓 先般は罷出、御珍藏の御書物拝借奉鳴謝候。謄写対校相済候分返璧申上候間、御查收被下度候。諸説不同記文は未校に候間、今少々拝借願上候。扱又甚恐入候へとも過日拝見仕候太子伝暦古版本巻物対校之為暫時拝借願上候。

御差支なくば卑价に附し御遣し被下度候。何れ拝芝萬々御礼可申上候。敬具

二月廿二日

大村西厓

狩野博士殿侍史」

菟書V-9 佐々木信綱書状

明治45年(1912)2月22日

佐々木は歌人、国文学者、菟書家。佐々木が借用した「岡本翁校正の万葉略解」は、清水浜臣・狩谷掖斎に和文や考証を学んだ岡本保孝の書入れのある橘千蔭『万葉集略解』。書状に年紀はないが、貸出簿から借りたのは明治45年2月22日から4月20日までの間。

〔翻刻〕

「拝啓 雪後さむさ加はり申候。過日は参上長座失礼仕候。さてそのをり拝見いたし候岡本翁校正の万葉略解全部暫時拝借願はしく、このものに御わたし願上候。我身参上願ふへきを失礼なから使を以て右御願申上候。

草々頓首 佐々木生

狩野大人御許」

【菟集自慢】

菟書VI-1 渡邊修二郎書状

明治42年(1911)8月16日

渡邊は在野の歴史家、菟書家。渡部文庫の売出しを聞き、数点に狙いをつけたが、狩野に悉皆

攫われ、不要の重複本を割愛してほしいと泣きついた。渡部文庫は渡部邁・信父子の文庫、東北大学と九州大学の狩野文庫にその蔵書印を捺した典籍が伝わるという。

〔翻刻〕

「八月十六日 拝啓、残暑厳敷候処、愈御安健奉賀候。扱甚乍唐突頃日「渡部文庫」売却書籍悉皆御買入之趣伝聞仕候。右売却之事ハ先般一書肆より聞及、数点買入之義談置候処、該書肆買求不調相成候由甚遺憾ニ存居候。就而は自然右御購入の中重複等ニテ御不用ノモノ有之候ハ、御割愛被下間敷哉、乍失礼相当之事相納度候。右御承諾相願度如此御座候。敬具

狩野先生」

渡邊修二郎

菟書VI-2 渡邊修二郎書状

11月8日

大探検の途上、渡邊は眼にした時計について一報した。大正11年(1922)10月21日に狩野は渡辺所蔵の和時計を500円で一括購入する約束を交わした。亀井高孝によれば、江戸時代に舶載あるいは国内倣製の時計や地球儀の蒐集でも他の追隨を許さなかったという。

〔翻刻〕

「拝啓 数日来大探検ヲ試ミ候処、大成功致候ニ付自ラ悦ヒ申候。古製時計其外数点ノ「エモノ」有之候、時計ハ即日修繕ノ為時計屋ニ遣シ

候、外ニ右探検中時計

古製「上に「シーソー」ヲスル子供アリ牛込郵便局ニ向テ三軒メ左ノ方時計ヤ」

銅ノ外側外ニ一個「神田美土代町(洋食タカラ亭ノ向ヲ入り五六軒目右側西洋古道具ヤ)」

右見当り候処、小生ニハ十分ニ鑑定スルノ知識ヲ所持不致候間、不買入候、同所御通行御序ノ節、御一見被成候様希望仕候、先ハ右申上度如此御座候。敬具

十一月八日

修拝

狩野様

小生購入ノ古製時計ハ「阿部正弘事蹟」ニ記スルモノ(写真)ニ似居候」

菟書VI-3 林若吉端書

明治43年(1910)7月18日

林は古書に限らず考古物を蒐集し、趣味人の同好会たる集古会を運営した。林が狩野から借りる『人倫訓蒙図彙』は元禄3年(1690)刊の職業図説。狩野が林を知ったのは意外に遅く、明治42年2月3日の東京帝国大学図書館長和田萬吉の紹介状によってである。

〔翻刻〕

「拝啓 兼而拝借之義願置候人倫訓蒙図彙明十九日午前拝趨致候間、御貸与之義奉願候。只今文行堂主人より承り候へハ近々御移転之由、

御混雑とハ拝察致候へ共、御引うつりニ相成候てハ急ニハ御貸与も願ハれ間敷と存、唐突ながら明朝参堂致候義ニ御座候。余ハ拝眉之上可申上候。草々

七月十八日夕 文行堂店頭にて認」

菟書VI-4 林若吉書状 大正5年(1916)11月9日

模範店員と称された文行堂の廣田健一郎の入営に際して林等が発起人となつて、神田仲町青柳亭での送別会の余興として珍書の出陳を顧客に求めた。狩野は『日本考輯』『觀鷺百譚』『中興鑑言』『日本長曆』『万葉古義』を出陳。後に廣田は独立して廣田書店を開く。

〔翻刻〕

「時下秋冷愈御清榮奉賀候。就てハ文行堂店員廣田健一郎君此度鴻の台野戦砲兵第十七聯隊へ入営之筈ニ候間、来る十一月廿五日午後一時より外神田仲町青柳ニ於て送別会(会費壹円)相催し度、当日余興として御銘々御所蔵の珍書(五点迄つゝ)陳列願度、甚乍御手数當日頒布の目録記載の都合有之候間、来る十五日迄ニ文行堂へ其書名冊数著者刊行鈔写の年月日等御一報願度候。草々

大正五年十一月八日

発起人 林若吉 山中笑 幸田成友

朝倉龜三 三村清三郎

狩野亨吉様」

菟書VI-5 笹野堅書状 昭和3年(1928)6月17日

笹野は国文学者、菟書家で、割愛を願った中村正直書入れのイソップの旧蔵者J.Naruseと菊池大麓の署名について質した。中村、成瀬錠五郎(J.Naruse)、箕作大六(後菊池大麓)は慶応2年(1866)幕府派遣の英国留学生。笹野は中村の『西国立志編』訳稿も所蔵。

〔翻刻〕

〔拝啓 梅天鬱々敷御座候処、御起居如何ニ御座候哉、さて先般御割愛願申候中村敬宇先生書入 Asop's Fables(洋書小一冊)旧蔵者署名J.Naruse へ有之候ハ如何なる人ニ御座候や御示教給り度、猶菊池大麓先生の署名も有之候。何か別ニ御記憶御座候ハ、御教示願度候。実ハ廿日ニ京都にてイソップに関する小展覽有之由、新村教授より出展を請はれ申候間、御かり申候事だけハ御知らせ申度卑札にて恐入申候へ共、御紹介迄如此御座候。頓首

六月十七日

笹野生

狩野先生御侍史」

菟書VI-6 集古会端書

5月9日

集古会は、東京帝国大学人類学教室の坪井正五郎の音頭で明治29年(1896)1月に始まった趣味人の同好会で、会員が考古遺物、古道具、古銭、玩具、古典籍、芝居物などの珍品・稀品を持ち寄った。実際の会の運営に当

たったのは坪井の遠縁の林若吉。

〔翻刻〕

〔拝啓 明十日午後一時より神田仲町大時計前青柳亭ニ於て五月課題ニヨリ武器類並ニ端午節句品陳列、会員の展覽ニ供し候間、御来会被下度御案内申上候也。五月九日

本郷区天神町一丁目七十二番地

根岸武香方 集古会

書肆文行堂主人ヨリ高名拝承ニ付申上候也」

菟書VI-7 小林文七書状

大正3年(1914)12月29日

小林は大浮世絵商で、浮世絵・尾形光琳の大菟集家。小林の家蔵の光琳特別展覧会の案内状は、狩野文書にはこのほかに大正6年12月23日が伝わる。小林には『光琳扇面画帖』(明治34年)『光琳画譜』(同)『尾形流四大家画譜』(同)がある。

〔翻刻〕

〔拝啓 茲迎新年愈御清祥之御事大慶之至りに候。陳は拙者三十年来浮世絵及光琳画の収集に苦心致し居候処、知人諸友之懇請有之、来ル一月三日所蔵光琳画を弊宅ニ陳列し、同好者之觀賞に供し候事に仕候間、御閑余も候ハ、御来觀有之度候。光琳画ハ意匠其他に於て東洋画家中一頭地を出し、今日世界的美術品として欧米人の珍玩措かざる所に候へハ、図案色彩等に就

ても我か美術工芸に応用すべき点尠からさるべく、此の国産開発の機運に際し光琳画之研究ハ有益の事に有之へき歟と存候。拙者蔵品の如きハ素より微々たるものに候へ共、御参考に資する所あるを得ハ幸これに過ぎず候。敬白

大正三年十二月 日

小林文七拝

狩野亨吉殿」

【珍書菟集 金平本、朝鮮本、絵画等】

菟書VII-1 吉田金兵衛端書

明治37年(1904)2月13日

元禄堂吉金こと吉田金兵衛は、破損・虫喰いがなく、全市中に稀なる極々上等の金平本70冊の一括購入を狩野に求めた。14日に狩野は店を訪れて確認、15日に東京帝国大学図書館長和田萬吉に知らせ、共同購入について協議を始めた。金平本とは金平浄瑠璃の正本。

〔翻刻〕

〔拝呈 陳は本日好事家ヨリ大形金平本極々上等七拾冊買取申、実ニ全市中ニ稀成物且又一点モ破損虫クイ等無之、表紙外題迄其当時ノ俄ニ有之候。又他ニ五冊十冊成て望人沢山ニ有候得共、可成ハ一完本故チラセ度なき品ニ有之也。明日中ニ御光来願上候。〕

菟書VII-2 和田萬吉書状

明治37年(1904)2月17日

2月17日に金平本70冊を狩野と図書館で二分することで決着した。疵本のため図書館が引き取った『西国卅三番巡礼記』『紅葉狩』は『国書総目録』に「東大(焼失)」とあるので、図書館本は関東大震災で焼失、狩野本は明治40年に国書刊行会から翻刻出版。

「翻刻」

「拝白 過刻御届被下候金平本七十冊ノ中最初御望ノ二十冊并ニ外五冊差出候間、御検収被下置候。

五冊ノ分ハ別ニ是ト申ス標準モ附シ難候マ、同文異版ノモノ五対アルヲ幸ヒ貴下ト本館トニ等分仕候間、左様御承知相成度、尚又「もみしかり」「西国卅三番順礼」ノ二部ハ疵本ノ処、本館ニ引取申候間、是応答被下度候

本ハ如何ニモ古色ヲ其儘ニ而誠ニ心持宜敷、此ル出物ハ又ト無之ト被察候。御蔭ヲ以テ本館ノ価値ヲ引上候様ニ而嬉敷存上候。先ハ右迄。

草々頓首

二月十七日

和田萬吉

狩野賢台几下」

菟書Ⅶ-3 磯部亀吉端書

明治42年(1909)10月23日

狩野は朝鮮本の蒐集にも手を染め、和田萬吉でさえ初めて見たという『東国文献』の写本を所蔵していた。磯部屋二代亀吉が渡韓して買い入

れた珍籍のうち最初の出荷分が届いたと狩野に報じたのもけだし当然だろう。

「翻刻」

「拝啓仕候。陳ハ先般より厚き御愛顧を蒙り難有御礼奉申上候。扱今般小生義韓国へ参り珍籍種々買入、去ル十九日帰宅仕り、最初出荷の分丈昨日着荷仕候間、御思召も有之候ハ、何卒上覧御買上之程偏ニ懇願奉申上候。頓首」

菟書Ⅶ-4 『朝鮮本計算書』

狩野は朝鮮本6部¹⁰⁰⁵冊(他に冊数不明2部)、遺墨3帖、拓本8葉を韓国から3回に分けて輸入した。時期は未詳。狩野は大学・公立・私立の図書館に蔵書を買ったが、朝鮮本の売却を確認できるのは九州帝国大学だけである。

菟書Ⅶ-5 吉田金兵衛書状

明治37年(1904)9月6日

浮世絵商の草分けの一人吉田は、墨摺大判12枚を1巻に仕立てた極々珍物の鳥居清信筆の春画の購入を狩野に持ちかけた。狩野は春画の蒐集でも折り紙付なので、清信を買ったはずであるが、狩野文書に狩野の春画蒐集をうかがわせるものはほとんど残されていない。

「翻刻」

「拝啓 陳は秋冷之候御貴館様倍々御清福大賀之至ニ奉存候。偕今回鳥居清信画墨摺ニテ在

名又ハ年号等有之、大判十二枚物ニテ極々ウブノ尽巻物ニ相成、尤春画成は思召如何ニ候哉御伺申上候。乍然極々珍物ニ有之候。且価は金貳拾五円ニ願上候間、御都合次第御光来待上候。外ニ華染図考千歳乃ため志折帖有之候。先は右御報告迄、早々敬白

九月六日

吉田金兵衛九拜

狩野様」

菟書Ⅶ-6 文行堂端書

明治38年(1905)11月20日

文行堂二代横尾勇之助から「新見家日記并公用書類一ト山」の買入れを知らされた狩野は一括購入した。新見家記録は主に旗本新見正登・正路二代にわたる史料で、他に類例のない公用日記・書留を含み、幕政史の研究に不可欠である。東北大学狩野文庫蔵。

「翻刻」

「新見家日記并公用書類一ト山買入候付、御一覽被下度、此段御報申上候也

十一月廿七日夜」

菟書Ⅶ-7 鹿田静書状

明治37年(1904)12月4日

鹿田松雲堂は大阪の古書肆。狩野が古書目録で注文した『日本書紀』は田中光顕に先を越された。田中は内閣書記官長、警視總監、宮内大臣などの要職を歴任した土佐閥の政治家である

が、蒐書家としても名があつた。狩野が買った『六百介図』は貝類の図譜。

〔翻刻〕

〔拝呈 愈御安康奉賀候。偕此内弊堂書目致御送付仕候処、今般御注文被下難有奉存候。御注文之内日本書紀新板は此程田中光顯様へ相願申、持合不申候二付、左記分御郵送仕候。

● 拾二圓 六百介図 上写本 七冊

● 十五錢 小包料

右之通ニ御座候。御入手之上は御序ニ代金御送附被下度候。先は御案内迄如此ニ御座候。拝具

鹿田松雲堂

狩野先生御侍史

三十七年十二月四日

蒐書Ⅶ 8 河井書店書状

6月12日

詳細は不明ながら、狩野の谷文晁蒐集が知れるのは、某家秘蔵の文晁の幅を勧める本郷の河合書店のこの書状と「文晁関係の御秘蔵の全部」を撮影する日を確認する大正6年(1917)4月15日の美術史家相見繁一(香雨)の端書が今に伝わるからである。

〔翻刻〕

〔拝啓 毎度御愛顧蒙難有御礼申上候。陳は昨秋或家の秘蔵の文晁正味の幅買入申候。品は保証仕候。代価は金五拾五円あれば上納仕候。如何御座候哉、御覽ニ備申候。何卒御買上奉願候

也。

六月十二日

河井書店拝

狩野様執事御中」

〔翻刻底本 『新群書類従』『文明源流叢書』

蒐書Ⅶ 1 和田萬吉書状

明治38年(1905)7月20日

重要な国書のうち未刊本と稀覯の既刊本を翻刻出版し、会員に頒布する国書刊行会の評議員就任を東京帝国大学図書館長和田萬吉から要請され、狩野は受諾。総裁大隈重信、会長重野安繹、理事市島謙吉他、評議員には京阪に涉つて図書趣味を有する学者をほぼ網羅。

〔翻刻〕

〔拝啓 甚暑相催候処、弥々御清安奉賀候。偕今回有志者相謀り、国書刊行会ト云フヲ組織シ、古今ノ有益ナル国書ニ而未刊本又ハ流布少キ已刊本ヲ上刻シ、会員ニ頒付ノ計画成立致シ候。就而ハ同会評議員トシテ貴下ノ御尽力ヲ乞度旨理事市島謙吉君ヨリ願出ラレ、小生其御取次ヲ仕候。何卒御快諾ヲ賜り度、尤モ評議員ハ既定ノ分、上田、三上、芳賀、萩野、井上頼圀、小杉楳邨、大槻文彦、坪内雄蔵、幸田成行等約二十名計リ有之、小生亦其末ニ列御座候。折々会合書物ノ選択其他ニ就キ協議候位ノ事ニ而格別ムツカシキ事ハ無ク、大抵ハ特別委員五六名、理事三名ノ間ニ而取扱候様決定致候。昨日

右申伺候為高等学校へ参上仕候処、懸違拝芝ヲ不得候。甚咄嗟ノ御依頼ナガラ折返し御返事賜り度悩請仕候。草々頓首

七月二十日

和田生

狩野賢兄江」

蒐書Ⅶ 2 国書刊行会書状

明治40年(1907)7月18日

国書刊行会は、『新群書類従』第9歌曲(3)金平本の部の底本とした34部を東京、京都のいずれに返すかを狩野に問い合わせた。金平本は金平浄瑠璃の正本。当時、狩野は京都帝国大学文科大学長、第9を校訂した幸田露伴とは旧知で、ともに国書刊行会評議員。

〔翻刻〕

〔拝啓 炎暑之候愈々御清穆奉賀候。扨御愛蔵の金平本長々拝借仕り難有御礼申上候。幸田露伴氏の担当に係る新群書類従金平本の部既に編纂了り候に付、拝借の書籍御返納申上度候。就而は尊宅へ持参致候而可然哉、又ハ京都大学の方へ御返可申上候哉、御指図を仰ぎ度候。尚拝借致候冊数ハ卅四冊と存候へ共、当時借用に罷出候者目下他へ参り居り、分明致兼候。乍御手数借用証御調の上御一報被下度奉願候。

勿々敬具

七月十八日

国書刊行会編輯所

狩野亨吉殿侍史」

菟書Ⅶ-3 『新群書類従』第9

(国書刊行会、明治40年(1907))

第9収載の金平本40部中34部が狩野本。東北大学狩野文庫の金平本40部中16部が大阪毎日新聞社編『金平本全集』(大正15年)にコロタイプで複製されているが、第9収載の40部とは重ならない。狩野は金平本を総て東北帝国大学に売らなかったようである。

菟書Ⅶ-4 国書刊行会書状

明治40年(1907)7月23日

国書刊行会は、業平三段本・箱伝授三段本・一谷坂落三段本を除く金平本34冊を狩野に返した。『新群書類従』第3の底本とするため借用を延長した3冊は、東北大学狩野文庫に現存(『業平河内通三番続(歌舞伎)』『箱伝授三番続(歌舞伎)』『一谷坂落三番続』)。

〔翻刻〕

「拝啓 御秘蔵の金平本長々拝借仕り難有御礼申上候。拝借仕候卅七冊の内卅四冊だけ函共に唯今御返納仕候間、御查收被下度候。『業平』

「箱伝授」「一谷坂落」の三冊は来月迄拝借仕度、依而別紙借用証差上申候。何卒御許容被下度候。敬具

七月廿三日

国書刊行会編輯所

狩野亨吉殿侍史」

菟書Ⅶ-5 『新群書類従』第3

(国書刊行会、明治41年(1908))

第3は水谷不倒校訂の演劇(3)、『続々群書類従』のような時代の古い硬い物ばかりでは、軟派の会員に満足を与えられないという説も有力で、坪内逍遙の提案によって文芸に関する卑近の書物を収めた『新群書類従』が編纂されたという。

菟書Ⅶ-6 国書刊行会書状

大正2年(1913)12月26日

狩野所蔵の『暦象新書』3部中1部を謄写の間を省くため原稿として用いたいと申し出た国書刊行会に対し、狩野は丁寧地使用して元通り製本して返せばよいと指示した。小鴨壱籠はその礼。『暦象新書』は愛着のある書だけに狩野は協力を惜しまなかった。

〔翻刻〕

「拝啓 嚴寒之候御清適奉賀候。陳は暦象新書長々拝借仕候のみならず壱部ハ御言葉に従ひ原稿に使用致候為め汚損相生じ申訳無之候。本

日午延引別本と共に七冊御返納仕候間、御查收被下度候。右所載の文明源流叢書第二ハ来春出来次第献上可仕候。尚小鴨壱籠御厨下に進上仕候間、御笑納被下候ハ幸甚に御座候。敬具

十二月廿六日

国書刊行会 山田清作

狩野先生侍史」

菟書Ⅶ-7 『文明源流叢書』第2

(国書刊行会、大正3年(1914))

第2は西洋科学に関する訳述書6種20巻を収める。志筑忠雄『暦象新書』はその一つ。緒言に「従来写本にて伝わりしを以て、魯魚の誤少なからず。爰に収むる所は狩野博士所蔵本を底本とし、異本を以て校訂せしものなり」とある。

【菟書の売却と狩野の債務

東北帝国大学、九州帝国大学、日比谷図書館等】

菟書Ⅸ-1 『送本控』

大正元年(1912)10月2日に総額3万円で東北帝国大学図書館への蔵書の売却が決定。売却総数6万冊、蔵書の8割に当たる。狩野は、金があれば図書館を建て公開するのが上策、図書館に寄附するのが中策、廉く纏めて図書館に譲るのが下策と語っていたという。

菟書Ⅸ-2 澤柳政太郎宛狩野書状草稿

大正元年(1912)11月

狩野文庫購入のため3万円を寄附した仙台出身の貴族院議員荒井泰治が東北帝国大学廃止又は移転の場合、文庫は宮城県立大学へ移管という条件をつけたため、狩野は荒井は出資者にすぎないと反発した。旧友の総長澤柳政太郎は狩野をなだめ、荒井を説得した。

〔翻刻〕

「尊書拝読、御尋ノ件左ニ御答申上候。一 蔵書ヲ売渡ス契約ハ去月十月初旬相整へ、書籍代価参万円ノ内金五千円ハ既ニ領收シ、残金ハ五年賦ニテ受取ル事ニ相成居候

右契約ニヨリ書籍一万冊以上ハ既ニ發送致シ、目下続々送出中ニ御座候

一 先便文面明細ナラサリシヤト思ハル、点重ネテ申上候。

蔵書ハ東北大学へ売渡シタル事ニテ、荒井へ譲リタル儀ニ無之候。荒井ハ唯同大学ヲシテ小生ノ蔵書ヲ買取ラシムルタメ同大学ニ対シ六年賦ヲ以テ金参万円ヲ寄附スル契約ヲ為タルマテニ候」

菟書IX-3a 『大正十年三月至十四年二月九州帝

国大学医学部眼科教室納入書目』

親友菅虎雄の娘婿で旧知の九州帝国大学医学部教授大西克知に頼まれ狩野は眼科教室に和漢の古医書を買った。菱山雄平が納入者であるのは、反町茂雄によれば、自分の名では悪いから、門の傍らの菱山の名義を用いたという。狩野は西青柳町、菱山は東青柳町の住。

菟書IX-3b 『大正拾年八月以降九州帝国大学

医書目録』

菟書IX-3c 『日比谷図書館二買上 錦絵類目録』

武者絵・相撲絵・役者絵・明治役者絵・美人絵・源氏絵等 8753 枚を 3365 円で売却。時期は不詳。幕末・明治の錦絵であるが、狩野の蒐集がそれに止まらないことは、東北大学狩野文庫に伝わる『歌麿錦絵目録』から容易に想像がつこう。

菟書IX-4 狩野文庫大入札会

関東大震災前の最大の入札会。井上喜多郎・斎藤琳瑯閣・中村善七・原田西山堂・村口半次郎・横尾文行堂・吉田吉五郎が主催して大正11年(1922)4月26日と27日に神田錦町の松本亭で行われた。両日の出来高は 21448 円 8 銭。入札 35 古書肆中、文行堂 4951 円 10 銭、村口書店 3948 円 20 銭と他を圧倒する。

菟書IX-4a 『第壹号 山帳』

大正11年(1922)4月26日

菟書IX-4b 『第貳号 山帳』

大正11年(1922)4月27日

菟書IX-4c 『狩野亨吉氏蔵書売立展覽目録』

大正11年(1922)4月

菟書IX-5 狩野の債務

第一高等学校中退の山本修三の東京鋼鉄製作所に大正8年(1919)に関わり、旧友・旧知から

出資を募った。11年5月の債務 41535 円、12年3月の債務 50035 円、工場の債務 5300 円。13年10月の東京鋼鉄製作所経営の匿名組合の解散により債務 18 万円全額を負担。

菟書IX-6 銀杏やすり

東京鋼鉄製作所の製品。商標は銀杏で狩野のデザイン。狩野が鋼鉄の硬度試験などを依頼した東京帝国大学工学部機械工学科教授内丸最一郎は、狩野の第五高等学校時代の教え子で、明治32年(1899)工科を首席で卒業、理科の寺田寅彦・木下季吉と同窓。

【菟書の寄贈】

第一高等学校、東北帝国大学、東京帝国大学】

菟書X-1 御寄贈図書目録 明治38年(1905)

狩野は、希臘並羅典 15 部 24 冊、独書 8 部 15 冊、仏書 55 部 68 冊、英書 13 部 40 冊、巴利語書 1 部 1 冊、軸物 1 部 2 軸、和漢書 3 部 7 冊を寄贈。

菟書X-2 『朝廷御鷹野之影』2 卷 栄川院筆写

養川院筆写・飯嶋助九郎筆

四季折々の鷹狩りを描く。狩野が明治38年(1905)に第一高等学校に寄贈した軸物 1 部 2 軸がこの絵巻物。栄川院は木挽町狩野家六代狩野典信、養川院は七代狩野惟信、飯嶋助九郎は木挽町狩野派絵師。

蒐書X-3 第一高等学校礼状

明治44年(1911)12月25日
狩野が寄贈したのは和洋書85部143冊。他に第一高等学校には明治39年(1906)3月に図書、明治43年4月20日に佛書1部3冊、大正5年(1916)5月5日に白河結城氏磨崖碑拓本1部3軸を寄贈。

蒐書X-3 御寄贈図書目録

明治44年(1911)12月25日

蒐書X-4 東北帝国大学附属図書館受領状

大正13年(1924)6月21日

狩野は東北帝国大学図書館に蔵書を売却しただけではなく、寄贈した。この時、寄贈したのは元曲選48冊。元曲選は中国明の戯曲選集。

蒐書X-5 東京帝国大学史料編纂所長礼状

昭和9年(1936)3月14日

狩野が寄贈したのは北條氏照安堵状1通。狩野は史料編纂所に蔵書を売却したこともある。東京帝国大学については付属図書館と東京文芸台に蔵書を寄贈。

鑑定

【狩野の鑑定会社、明鑑社への鑑定依頼】

鑑定I-1 科学的方法に拠る鑑定と登録に就て
鑑定方針の再稿。初稿は昭和4年(1929)4月1日。社名を自然社から明鑑社に変更。「鑑定に誤り多いこと」、「鑑定に誤の多い理由」、「旧式の鑑定法」、「新式の鑑定法」、「鑑定の上に保証」、「物品の登録」、「弊社の使命」について営業用だけに平易に説明している。

鑑定I-2 明鑑社営業案内ゲラ

明鑑社の所在地が、小石川区音羽町1・2から小石川区大塚坂下町55に変わった。狩野が転居したのは昭和6年(1931)12月で、ここが終の棲家となった。

鑑定I-3 明鑑社の申込書と封筒

昭和7年(1932)10月2日に静岡県周智郡熊切村の石橋一郎は、明鑑社の申込書と封筒を用いて、唐紙の売却を依頼するとともに近所の三農廣順固の絵の価格を問い合わせた。

鑑定I-4 『時事新報』掲載の明鑑社広告草稿

狩野が明鑑社の広告を出したのは『時事新報』の外に『秋田県人雑誌』が知られている。前者は五大新聞の一つ、後者は昭和3年(1928)創刊の県内外在住の県人による雑誌。狩野のやるこ

とには万事にそつがない。

鑑定I-5 篠原鬼子雄書状

昭和7年(1932)8月1日

『時事新報』に載る明鑑社の広告を見た山梨県北巨摩郡多麻村の篠原鬼子雄は、真筆の場合の家蔵の日蓮聖人自筆曼荼羅の価格、売買手数料、売買方法について問合せた。

【翻刻】

「酷暑の候益々御清祥の段奉大賀至極と存ぜられ候。陳は時事新報広告欄に依て承了仕り候が、「鑑定と評価」の題にて書画古文書等の評価を為さるべく拝承致候が、小生今回家宝の左記物件を手放す心得なるが、在京に相当なる知人もなく亦如何程の価格なるかも知らずにつき、御手数乍ら御社にて知れる範囲を御回答願度懇願仕り候。

左記

一、物件は日蓮上人自筆の「曼荼羅」にて古来より御極(鑑定書)数通有之尚極最近此界の大家の折紙付のものにて此に真偽は論ぜず、真物としての事。大さは二尺に三尺位、更に汚損の点無

二、真筆と仮定して今日何程位の価格あるものにや、亦之れを売買為すに当り御社にては何程の手数料を取るや

三、普通の書画と異なるにつき如何なる方法に

て売買するや。

右御願申上候。業務案内一部御郵送願上候

〔上欄〕返信要旨

一、此上表装上等、真筆且由緒アルモノトシ

テ五百以上千円前後

二、□□五百円以下

三、売方ハ東京社常設展覽場ニ托ス

八月三日

鑑定Ⅰ-6 女池賢猷書状

昭和5年(1930)7月4日

『秋田県人雑誌』に載る明鑑社の広告を見た小樽市入舟町の女池賢猷は、家蔵の浮世絵美人画の絵師雪丸の人物と浮世絵としての価値について問合せた。

〔翻刻〕

「拝啓 秋田県人雑誌の広告にて御社が書画の鑑定致さるゝ由を承り、左記件を御依頼致し度く存じ居り候。小生三尺大の浮世絵美人の軸物を持ち居るが、落かんは輪かくは蝸牛にて中に雪丸と有之候、さきに東京の小泉雄作氏に鑑定を依頼候が真蹟なる事は解かり候雖も雪丸なる絵師の人物詳かならず、且つ浮世絵として価値あるものか一向不明に候。

筆者の人物、及び浮世絵としての価値を鑑定致され度と存じ居り候。鑑定大体何程に候や折返へし御一報下され度願上候也

七月三日

北海道小樽市入舟町七ノ十一 女池賢猷

明鑑社御中」

鑑定Ⅰ-7 加藤正一書状

昭和11年(1936)10月9日

『東日新聞』で狩野が書画鑑定の大家であることを知った群馬県利根郡糸之瀬村の加藤正一は、家蔵の掛軸の鑑定を依頼した。『東日新聞』は『毎日新聞』の前身たる『東京日日新聞』の略称。

〔翻刻〕

「拝啓 秋冷之候と相成り候処、御尊家益々御清栄之段奉賀候。陳ば今回東日新聞紙上にて貴尊の書画の御鑑定大家なる由拝承仕り候に付き、小家にも掛軸数本之有り候に付き、農家の折を見て上京致し、貴尊の御鑑定を御願度と存居り候に付き、御多忙中恐縮の次第に御座候へ共、御鑑定料金を御一報相願度御頼申上候、早々敬具

十月九日

文学博士狩野亨吉殿

加藤正一

【贋作喝破 神代古文書、本居宣長、田能村竹田】

鑑定Ⅱ-1 狩野亨吉「天津教古文書の批判」

『思想』昭和11年(1936)6月

昭和10年8月に日本医事新報から天津教の神代古文書の歴史的価値を問われた狩野は、昭和3年(1928)入手の古文書の写真5枚を検討、最近の偽物と断定し、結論のみを回答したが、天津教の浸透を座視できず、詳細な古文書批判を公表した。神代文字の解説は見事。

鑑定Ⅱ-2 第1153号鑑定書

『鑑定日録(1) 九年 十年』

昭和10年(1935)8月に天津教の神代古文書の歴史的価値を問うたのは、函館市鶴岡町の橋本敬三である。橋本は医師であり、論文で狩野が最近の偽物の旨を抽象的に回答したと述べる条件に第1153号鑑定書は合うので、日本医事新報の依頼とは橋本のことだろう。

〔翻刻〕

「問 茨城県磯原にある神官竹内家所蔵の神代古文書に関する歴史的価値について、尚この書について批評したる諸文献ありや否、並にこの古文書は印刷となりて出版せられあるや、あらバその発行所を知りたし。

函館市鶴岡町卅一番地 橋本敬三

天津教古文書に関する御質問は三つになつてゐるが、先づ第一に其歴史的価値について申せば、是は一言してマイナス、イマジナリーです。と云ふのは零以下であるばかりか有害でもあり、説くところの事実は珍奮翰、志すところの

目的は明にし難い等超凡の意味ありと云ふのです。あの天津教の根本記録と云ふものは、俄作りの神代文字を以て、是も同じく神代文字で書いた上ウヘツツミ記といふ本の出鱈目を焼直し、其序

でに聞きかじった西洋の伝説で味付け、近頃の国粹思想で色上げしたと云ふ程度のもので、全く歯牙にかけるに足らない代物であります。それでは怪しからぬことになるが、天津教を幕にした様な数等けしからん方法を以て、所謂大成效を遂げてゐる族が沢山ありますのですから、吾人はあらゆる宣伝に対して用心してかゝらなければ、飛んだ馬鹿を見ることになります。吾等の職掌がら知つてゐる、葉や精神療法について考へれば類推して分ることです。凡そ世間の秘密で、かの俚諺に金と女の世の中、鰯の頭も信心からと云ふ、タツタ二句に含まれてゐる原則で研究して見て、尻尾出さないものは断じて有得ない。人々宜く此原則を振翳してインチキ征伐に精進すべしである。此大切な原則を公開した所で第二の御質問に移る。天津教が話題になる様になつたのも十数年を経てゐるのであるから、之を批判した新聞や雑誌の記事又は成書もあるかも知れないが筆者ハ寡聞にして殆ど知らない。昭和五年十二月初旬天津教関係者が警視庁に召喚されて取調を受けたことかあつたが、其際の新聞とか雑誌とかに学者の批評も紹介されてゐると思ふが、私は東京日々新

聞の第一面の記事を見たゞけて、後は読まなかつた。成書については出版年鑑を数年間に亘り探して見たが、亀相であつたゞめか見出しかねた。却て天津教側のものハ一二見当つた。偕此様に文献も知らない貧弱な知識で、どうして大胆な断案を下し得たかと云ふに、私は幸に根本材料の代表的ものの写真に由つて研究を為し得たからである。終りに第三の御質問の刊行を経てゐるか否やのことは是又確かなところを知つていた訳ではないが、多分出版されてないと思ふ。あんなものを出版したら最後、忽ち専門家の四面攻撃に会へ、木端微塵に碎けて消散する運命を持つてゐるものであります。

昭和十年九月一日震災弔慰黙禱後。詳細ノ考究ハ別ニ筆録シテ之ヲ存ス」

鑑定Ⅱ-3 島田高敏書状

昭和13年(1938)3月16日

秋田県雄勝郡西成瀬村の島田高敏が、本居宣長『言葉の玉緒』序及び第1巻残闕半紙墨付5丁の鑑定を依頼した。刊本『言葉の玉緒』は安永8年(1779)の序。

〔翻刻〕

「拝啓 貴社益御繁栄之段奉敬賀候。陳ハ本居宣長ノ言葉ノ玉緒半紙五枚ニ認メタルモノ御鑑定ヲ得度御座候ニ付、信偽御判明被下様奉願上候。右御鑑定料並ニ返信料相添ヘ此段奉願候。

昭和十三年三月十六日

秋田県雄勝郡西成瀬村吉野 島田高敏
東京市小石川区大塚坂下町五五 明鑑社御中」

鑑定Ⅱ-4 第1534号鑑定書『鑑定日録(3)十三年』

形式については第1巻の途中で不自然に擱筆していること、内容については誤字・脱字・顛倒・書損じが多く、単なる癖と見なせない誤りがあること、筆蹟については安永期の宣長の筆蹟と異なること、以上から狩野は宣長の自筆ではないと鑑定した。

鑑定Ⅱ-5 久保貞次郎「鑑定の先達・狩野亨吉」

〔『芸術新潮』昭和39年(1964)12月

昭和15年(1940)7月11日夜、三枝博音の紹介状を持つて田能村竹田『蘿富図』の鑑定を依頼した経緯を久保が書き残している。鑑定に関する回想録は珍しい。久保は昭和8年東京帝国大学文学部教育学科卒の美術評論家、戦後、滝川太郎贋作事件に巻き込まれた。

鑑定Ⅱ-6 第1739号鑑定書

『鑑定日録(5)十五年 十六年』

『蘿富図』は賛が問題で、最後の「撃節」に続くべき「嘆賞」を欠くため、文意甚だ不適切、真蹟と断ずるには躊躇する、と狩野は鑑定した。画幅を取りに来た久保が帰る間際、この程度な

らば、まあ業者の間では本物として通りますね、と狩野は慰めたという。

【筆跡鑑定 直覚、分析、総合法】

鑑定Ⅲ-1 第1195号鑑定書

『鑑定日録(2)十一年 十二年』

昭和10年(1935)2月3日に狩野は東京民事地方裁判所第15部から筆跡鑑定を命じられ、執筆の姿勢、字画の排次、運筆の速度、字画の傾斜、直覚的に判断した文字の全形、技巧の上から鑑定を行い、3月7日に鑑定書を提出した。

鑑定Ⅲ-1 鑑定事項

鑑定Ⅲ-2a 第1700号鑑定書

『鑑定日録(4)十四年』

昭和10年(1935)2月3日に狩野は東京控訴院第6民事部から筆跡鑑定を命じられ、直覚法、分析法、総合法により鑑定を行い、10月21日に鑑定書を提出した。

直覚法では文字通り直覚を働かせて考察する。分析法では、起筆、運筆、止筆の3点について類似・差異の点数により+3から-3をあたえて数値化して考察し、運筆の速度、字画の傾斜は度外視する。

総合法では感情の影響と姿勢の影響を考察する。特に今回は筆記の姿勢が鑑定項目の一つで

あるため、日本大学病院の患者28名に仰臥とそれ以外の姿勢で氏名を書いてもらい参考とした。分析法は科学的鑑定を主張した狩野ならではの方法といつてよい。

鑑定Ⅲ-2b 鑑定事項

鑑定Ⅲ-2c 分析法による筆跡鑑定

鑑定Ⅲ-2d 総合法の筆跡鑑定資料

【鑑定に関する書物の出版】

鑑定Ⅳ-1 鑑定関係自著の販売広告草稿

狩野の鑑定に関する著述としては、昭和5年(1930)9月29日の学士会第91回茶話会における講演の筆記「科学的方法に拠る書画の鑑定と登録」、岩上芳外共編『書画落款印譜大全』第1輯・第2輯、「書画の鑑定特に落款印章の効用に就いて」(第1輯附録)がある。

鑑定Ⅳ-2 『科学的方法に拠る書画の鑑定と登録』(明鑑社、昭和8年(1933))

『学士会月報』掲載の昭和5年(1930)の学士会茶話会での講演筆記を許可を得て明鑑社版として出版。狩野は、書画の鑑定の意義、鑑定の難しさ、従来の鑑定法の不備を明らかにした上で科学的方法によるべきを説き、鑑定確保のための登録法の創定を主張した。

鑑定Ⅳ-3 『書画落款印譜大全』内容見本

「第一輯明治以前 製本出来」「第二輯維新以後 一月出来」「第三輯現代 二月出来」とあるが、なぜか第3輯はついに刊行されず、所載の印影壺萬五千個、古今の画家・儒者・名家約壺千名を蒐めた鑑定界前代未聞の大全は未完に終わった。装幀・題字は中村不折。(個人蔵)

鑑定Ⅳ-4 「日本鑑定協会」の事業

内容見本に挟み込まれた日本鑑定協会の入会案内。狩野は理事に名を連ね、鑑定専任方面を「一般、科学的鑑定」として異彩を放つ。理事の高橋学而は、狩野が第一高等学校校長の時に中退した春草の弟で、後に狩野が墓誌と記念碑銘を草することになる。(個人蔵)

鑑定Ⅳ-5 狩野亨吉・岩上芳外共編『書画落款印譜大全』第1輯

(武俠社、昭和6年(1931))

本書の意義は、330に及ぶ画家・儒者・名家の書画の鑑定に不可欠な落款と印章を原寸大の写真版で掲載したことである。狩野は増補改訂を怠らず、鑑定関係自著の販売広告に既刊2冊の購入者には増補改訂の結果をまとめた一書を贈ると約束している。(個人蔵)

鑑定Ⅳ-6 緑川秀男宛書状

昭和12年(1937)1月6日

『書画落款印譜大全』は共編となつてゐるが、友人の声援のため附録の一篇を起稿したにすぎない、と狩野は述べてゐる。東北帝国大学図書館に昭和18年(1943)に狩野旧蔵の「諸家の印譜約一千余部」が納入されているので、狩野の言は謙遜と知れよう。

〔翻刻〕

「一月六日緑川秀男宛 貴翰拝誦、益々御清祥奉賀候。御尋ノ本ハ書画落款印譜大全第一編(東京市芝区南佐久間町二ノ一〇東京社發行、定価十円。古本価格三四円)ニ可有之候。此書ハ岩上方外ト小生トノ共著ト相成居候得共、小生ハ唯友人ノ声援ノ為メ編末ニ「書画の鑑定特に落款印章の効用に就いて」ト題スル一章ヲ附録トシテ起稿致シタルニ過キス候。シカモスペースノ制約ニヨリ記述簡單ヲ旨トシタルタメ、著シク難解ナリト目セラレ居候。同趣旨ノコトヲ昭和五年九月学士会茶話会ニテ述ヘタルコト有之、其時ノ月報記事ヲ抜刷シタルモノ別封ニテ呈上致候間、御覽被下度候。敬具」

書

【狩野の揮毫 『漱石全集』『法制史の研究』】

書Ⅰ-1 「積善之家厥福惟昌」

明治10年(1877)

狩野は11歳11ヶ月の明治10年5月9日に第一番小学校下等第2級を卒業し、学業優等につき書籍を授与されているので、2月か3月の習字作品。この句は「積善之門必有余殃」と対句。出典は『芸文類聚』巻23人部7鑒誠。

書Ⅰ-2 岩波茂雄書状

大正6年(1917)12月18日

前年12月9日の夏目漱石の死後、すぐに全集の刊行が決まり、岩波は刊行会代表に就任、狩野は編集顧問に名を連ねた。9月12日に岩波が来訪、全集の表題の揮毫を依頼。第1巻の刊行を2週間後に控えて焦った岩波は、狩野に扉の書名の揮毫を督促した。

〔翻刻〕

「謹啓 又々御手数数の所誠に恐縮に不堪候へ共、漱石全集第一巻の扉の字至急御揮毫相煩はし度伏して奉願候。小生拝趨御願申上ぐへき処、先生御不在の由なれば使を以て御願申上候段不悪御憐察奉候

明日午前十時頃参上可仕候間、若し御都合出来候はゞそれまでに御間に合せ下され度、勝手のみ申上げて失礼に奉願候。拝具

十二月十八日

茂雄

狩野先生侍史」

書Ⅰ-3 『漱石全集』第1巻

(岩波書店、大正7年(1918))

扉の書名は狩野の手になる。

書Ⅰ-4 『漱石全集』背文字下書き

大正8年(1919)

第12巻は書簡集。大正8年(1919)刊。狩野はなぜか刊行会に漱石来信を提供せず、戦前版全集掲載は2通のみ。戦後版で73通に増えるのは、狩野の死後、遺品を整理した某が持ち出したとみる他はない。狩野文書には全集未掲載の漱石書状・端書各1通が伝わる。

書Ⅰ-5 岩波茂雄書状

大正8年(1919)1月25日

岩波は、『漱石全集』第11巻の扉の書名とともに2月15日刊行の三浦周行『法制史の研究』の背文字の揮毫を狩野に依頼した。三浦は日本法制史の祖、狩野が京都帝国大学文科大学長の明治40年(1907)に講師として招聘され、国史学を担当、明治42年(1909)教授。

〔翻刻〕

「謹啓 毎度御迷惑かけ誠に恐縮に存し候へ共、全集の扉別紙の如く御書き被下度奉願候。

尚又重ねて御手数相煩はしたきは三浦周行先生の法制史の研究に御座候。三浦先生も非常に先生の御手を煩はす事を希望いたし居り候間、何卒奉願候。参上御願申上げたく電話を御かけいたし候処、御不在との事故、乍欠札手紙を以て御願申上候。拝具

一月廿五日

茂雄

狩野先生侍史

書Ⅰ-6 三浦周行『法制史の研究』

(岩波書店、大正8年(1919))

岩波から依頼を受けた狩野が背文字を揮毫したまではよかったが、結果からすると、狩野はうっかり書損じを渡してしまい、刊行が迫っていたため岩波は確認せずに印刷所に回したのだろう。誰がいつ誤りに気付いたかは知る由もない。

【狩野の揮毫 碑文、『日本科学古典全書』】

書Ⅱ-1 従二位勲四等侯爵佐竹義生公墓誌銘

拓本

義生は秋田の佐竹宗家³³代当主。慶応3年(1867)7月7日に生まれ、大正4年(1915)2月22日に死去した。狩野の父良知は藩校明德館と昌平黌に学んだ学者で、大館城代佐竹西家の家老を務めており、維新後も旧藩主家と狩野家の関係は絶えることはなかった。

書Ⅱ-2 石川孫市翁頌徳碑銘

大正2年(1913)5月

孫市は天保4年(1833)の奥羽大飢饉の時に窮民救済のため醸金した大館の商人。町議会が建碑を議決。大館町の依頼を受けて狩野が碑銘を草した。父良知の碑銘と佐竹義生の額篆を刻した明治29年(1895)5月の孫市の頌徳碑と同じ場所に狩野の碑も建てられた。

書Ⅱ-3 元弘二年暦本跋下書き

大正7年(1918)7月

日本鉱物学の祖にして大蒐書家和田維四郎雲村が村口書房初代村口半次郎から入手した印本仮字暦の残闕を狩野は元弘2年(1332)暦と鑑定した。朱批は漢学者にして第一高等学校教授塩谷時敏。狩谷掖斎が跋を草した永正11年(1515)仮字暦も雲村の有に帰している。

書Ⅱ-4 『日本科学古典全書』背文字下書き

朝日新聞社の企画した『日本科学古典全書』は、科学思想篇・諸科学篇・産業技術篇から成る基本史料の集成。狩野は監修者の一人。昭和17年(1942)3月から刊行が始まり、戦後も続いたが、ついに未完に終わった。既刊10冊。

書Ⅱ-5 『日本科学古典全書』第12巻

(朝日新聞、昭和18年(1943))

『日本科学古典全書』の編纂者は三枝博音。大正11年(1922)東京帝国大学文学部西洋哲学科卒。産業技術として採鑛冶金・農業・製造業・漁業・海上交通を取りあげたのは三枝の卓見。こと海上交通に限れば、『海事史料叢書』を編纂した住田正一が三枝に勝る。(個人蔵)

書Ⅱ-6 三枝博音「狩野亨吉先生の追憶」

(「科学古典」第3号『日本科学古典全書』

第12巻附録、昭和18年(1943))

『日本科学古典全書』第12巻刊行前の昭和17年(1942)12月22日に狩野は死去した。晩年の狩野を知る三枝の伝によれば、狩野は「何万といふ本が自分のところを流れたが、それで私の力は奪はれたよ」と洩らしたという。流石の狩野も年老いて気力がおとろえた。(個人蔵)

おわりに

履歴書草稿

東京鋼鉄製作所を経営する匿名組合解散の大正13年(1924)秋以降、反古の裏に記された。京都帝国大学辞職の理由には諸説あるが、「四十年父ノ喪ニ際シ辞職」は、官仕えを嫌いながら、父の生存中はその地位に止まったが、父の死で挂冠したという説を裏付ける。

「翻刻」「慶応元年出羽国秋田郡大館町ニ生ル、東京大学理学部及文科大学ニ学ヒ、明治廿五年第四高等学校教授、廿一年第五高等学校教授、同年第一高等学校校長、廿九年京都帝国大学文科大学教授トナリ倫理学ヲ講ス、四十年父ノ喪ニ際シ辞職シ、以来実業ニ志シテ成ラス、以テ今日ニ至ル、著書ナシ」

凡例

- 一、本リーフレットは、駒場博物館特別展「教育者・蒐書家・鑑定人 狩野亨吉 生誕150周年記念展」の展示目録として作成した。
 - 一、特に表記のない資料は、東京大学駒場図書館蔵である。
 - 一、引用は適宜句読点を補い、通行の字体に改めた。
- 本展覧会に際して、ご尽力戴いた各機関、個人の方々に心より御礼申し上げます。

狩野亨吉略歴

慶応元年(1865)	1歳	11月28日、出羽国秋田郡大館町三ノ丸で誕生
明治2年(1869)	5歳	狩野家秋田に転任
明治7年(1874)	10歳	秋田県大平小学校入学
明治9年(1876)	12歳	狩野家東京に転任・番町小学校転入
明治10年(1877)	13歳	母千代子逝去(40歳)
明治11年(1878)	14歳	番町小学校卒業。
明治12年(1879)	15歳	9月、東京府第一中学校変則科入学
明治17年(1884)	20歳	9月、東京府第中学校退学
明治19年(1886)	22歳	東京大学予備門入学(第四級第二組)
明治21年(1888)	24歳	7月、東京大学予備門修了
明治24年(1891)	27歳	9月、東京大学理学部数学科入学
明治25年(1892)	28歳	10月、家兄元吉逝去(29歳)
明治27年(1894)	30歳	7月、帝国大学理科大学(数学科)卒
明治31年(1898)	34歳	9月、帝国大学文科大学(哲学科)入学
明治39年(1906)	42歳	7月、帝国大学文科大学(哲学科)卒
明治40年(1907)	43歳	9月、帝国大学文科大学(哲学科)入学
明治41年(1908)	44歳	7月、帝国大学大学院入学
大正元年(1912)	48歳	9月、帝国大学大学院退学、第四高等学校教授任官
昭和17年(1942)	78歳	3月、第四高等学校教授依願免官
八田三喜「狩野亨吉先生」		1月、第五高等学校教授任官(教頭)
俊二郎『狩野亨吉の生涯』		11月、第一高等学校校長着任
		7月、京都帝国大学文科大学教授転任
		10月、文学博士学位授与
		12月、父良知逝去(79歳)
		10月、京都帝国大学文科大学教授依願免官
		以後は鑑定で身を立てる。
		東北帝国大学総長澤柳政太郎の周旋で、同大学図書館へ第1次「狩野文庫」納本。
		12月22日、永眠
		昭和18年(1943)、青江
		昭和62年(1987)等参照

教育者・蒐書家・鑑定人 狩野亨吉 生誕150周年記念展 出展目録

番号	タイトル	年月
生涯		
はじめに-1	狩野亨吉回顧メモ	
はじめに-2	行李	
小学-1	狩野良知宛書状	明治7年(1874)8月19日
小学-2	下等小学第七級卒業証書	明治8年(1875)1月
小学-3	大試業優等につき世界商売往来一部授与状	明治8年(1875)2月
小学-4	証上等小学第八級卒業証書	明治11年(1878)4月
小学-5	学業優等につき筆墨紙授与状	明治11年(1878)4月6日
小学-6	Spencerian Penmanship 4	
中予-1	東京府学務課報告 第二号	
中予-2	町田忠治書状	明治11年(1878)12月9日
中予-3	退校願	明治12年(1879)9月18日
中予-4	『東京大学予備門一覽』	明治12年(1879)
中予-5	授業料之儀二付願	明治12年(1879)10月14日
中予-6	『東京大学予備門前本覺生徒優劣表』	明治16年(1883)
大-1	『帝国大学一覽』	明治19・20年(1886・1887)
大-2	受業料減額願	明治17年(1884)9月10日
大-3	Chemistry Rare Elements. Periodic Law Prof.Sakurai	
大-4	Astronomy	
大-5	楢田函数試験答案	
大-6	『帝国大学一覽』	
院-1	大学院入学許可証	明治24年(1891)7月10日
院-2	指導教官通知証	明治24年(1891)7月10日
院-3	Aesthetic. By Prof.Dr.Ludwig Busse	
院-4	狩野亨吉大学院退学許可証	明治25年(1892)7月15日
院-5	大屋八十八郎書状	明治25年(1892)7月19日
青-1	『蔵書記之附曆算書目』狩野良嘉	
青-2	冬期休業中旅行覚	明治24年(1891)1月2日～7日
青-3	蔵書律曆別志	
青-4	平山信端書	明治19年(1886)1月1日
青-5	平山信端書	明治21年(1888)11月2日
青-6	平山信・飯島正之助端書	明治20年(1887)8月10日
青-7	明治二十年黒磯に皆既日蝕を觀る記	
青-8	憲法発布式当日順序・賀憲法発布	明治22年(1889)2月11日
青-9	帝国大学提灯行列次第	明治22年(1889)2月11日
青-10	憲法発布を祝う第一高等中学生写真(駒場博物館蔵)	
夏目-1	芳賀矢一端書	明治35年(1902)10月19日
夏目-2	『職員進退』	明治36年(1903)4月10日
夏目-3	夏目金之助解嘱願(駒場博物館蔵)	明治40年(1907)3月31日
夏目-4	卒業写真(駒場博物館蔵)	明治38年(1905)7月
夏目-5	夏目金之助端書	
四高-1	第四高等中学校教授辞令	明治25年(1892)7月16日
四高-2	依願免本官	明治27年(1894)3月30日
四高-3	天文学 Notes on Elementary Astronomy, delivered during the Session	明治26・27年(1893・1894)
四高-4	方程式論	明治26・27年(1893・1894)
四高-5	生徒学資補助扣出納簿	明治25年(1892)11月～ 明治27年(1894)4月
四高-6	茨木清次郎書状	明治26年(1893)9月1日
四高-7	平山信書状	明治28年(1895)9月4日
四高-8	証	明治28年(1895)6月12日
五高-1	第五高等学校教授辞令	明治31年(1898)1月22日
五高-2	成績簿	
五高-3	狩野良知宛書状	明治31年(1898)1月23日
五高-4	澤柳政太郎書状	明治31年(1898)11月25日
五高-5	電報頼信紙	明治31年(1898)12月1日
一高-1	任第一高等学校長書状	明治31年(1898)11月24日
一高-2	明治35年卒業式辞草案	明治35年(1902)
一高-3	端書	大正3年(1914)3月23日
一高-4	補永茂助書状	明治38年(1905)8月15日
一高-5	三矢宮松書状	明治36年(1903)9月28日
清国-1	狩野亨吉宛服部宇之吉書状	明治37年(1904)1月7日
清国-2	京師大学堂官派外洋留学生章程	
清国-3	清国京師大学堂派定留学生二関スル書類	
清国-4	清国京師大学堂留学生二関スル第一年次報告書	明治38年(1905)1月

清国-5	清国京師大学堂留学生二関スル第二年次報告書	明治39年(1906)1月
鳩山-1	通学御届(通学御願)	明治33年(1900)7月27日～ 8月21日
鳩山-2	鳩山和夫書状	明治33年(1900)8月31日
鳩山-3	寄宿寮記録	明治26・34年(1893・1901)
鳩山-4	鳩山春子書状	明治35年(1902)3月16日
鳩山-5	「文学博士 狩野亨吉氏」(千栄木仙史編『学界文壇時代之新人』天地堂)	明治41年(1908)
鳩山-6	鳩山一郎「私の履歴書」(『私の履歴書』第7集、日本経済新聞社)	昭和38年(1963)
藤村-1	蘆野敬三郎書状	明治36年(1903)5月24日
藤村-2	蘆野敬三郎書状	明治36年(1903)7月10日
藤村-3	安倍能成「藤村操君を憶ふ」(『校友会雑誌』第128号)	明治36年(1903)5月
藤村-4	魚住影雄「自殺論」(『校友会雑誌』第137号)	明治37年(1904)5月
藤村-5	『第一高等学校一覽』	明治35年(1902)12月調
京-1	京都帝国大学文科大学教授辞令	明治39年(1906)7月5日
京-2	授業方法・教養ノ方針	
京-3	国府種徳書状	明治33年(1900)4月12日
京-4	内藤虎次郎書状	明治35年(1902)1月4日
京-5	谷本富・松本文三郎宛狩野亨吉書状	明治40年(1907)10月19日
京-6	退官願	明治40年(1907)10月8日

蒐書

蒐書Ⅰ-1	『蔵書目録』仁義礼智信	
蒐書Ⅰ-2	『書籍目録明治三十一年以降追加之部』	
蒐書Ⅰ-3	『狩野氏蔵書和漢書名細目録明治四十年現在(稿)』	
蒐書Ⅰ-4	『狩野氏蔵書和漢書名細目録索引』	
蒐書Ⅱ-1	狩野亨吉「記憶すべき関流の数学家」(『本朝数学通俗講演集』大日本図書)	明治41年(1908)3月
蒐書Ⅱ-2	狩野亨吉「志筑忠雄の星気説」(『東洋学芸雑誌』東洋学芸社)	明治28年(1895)6月号
蒐書Ⅱ-3	狩野亨吉「安藤昌益」(『世界思潮』第3冊、岩波書店)	昭和3年(1928)5月
蒐書Ⅱ-4	安藤昌益『自然真営道』(東京大学総合図書館蔵)	
蒐書Ⅲ-1	田中稻城書状	明治28年(1895)6月14日
蒐書Ⅲ-2	澤田吾一和算書借用証	明治34年(1901)
蒐書Ⅲ-3	遠藤利貞書状	7月11日
蒐書Ⅲ-4	三上義夫書状	明治42年(1909)11月20日
蒐書Ⅲ-5	平山信宛書状草稿	明治43年(1910)1月
蒐書Ⅲ-6	平山信書状	明治43年(1910)1月20日
蒐書Ⅳ-1	古写本延久年写『史記』他領収書	明治39年(1906)7月3日
蒐書Ⅳ-2	延久本『史記』孝文本紀借用書	明治40年(1907)9月1日
蒐書Ⅳ-3	「史記孝文本紀」(『仮名遣及仮名字体沿革史料』国定教科書共同販売所)	明治42年(1909)
蒐書Ⅳ-4	和田萬吉書状	大正5年(1916)11月10日
蒐書Ⅳ-5	三上参次書状	明治43年(1910)4月4日
蒐書Ⅳ-6	石川謙端書	大正6年(1917)12月10日
蒐書Ⅴ-1	『書籍借出氏名録明治廿七年五月以後』	
蒐書Ⅴ-2	『明治卅四年改 書籍貸出扣簿』	
蒐書Ⅴ-3	平出鏗二郎書状	明治34年(1901)9月30日
蒐書Ⅴ-4	朝倉亀三(無声)端書	大正4年(1915)3月12日
蒐書Ⅴ-5	朝倉亀三(無声)端書	大正7年(1918)1月6日
蒐書Ⅴ-6	展覧会出品物保管証	大正9年(1920)2月17日
蒐書Ⅴ-7	『狩野家図書貸出簿明治四十年五月以降』	
蒐書Ⅴ-8	大村西厓書状	明治45年(1912)2月22日
蒐書Ⅴ-9	佐々木信綱書状	明治45年(1912)2月22日
蒐書Ⅵ-1	渡邊修二郎書状	明治42年(1911)8月16日
蒐書Ⅵ-2	渡邊修二郎書状	11月8日
蒐書Ⅵ-3	林若吉端書	明治43年(1910)7月18日
蒐書Ⅵ-4	林若吉書状	大正5年(1916)11月9日
蒐書Ⅵ-5	笹野堅書状	昭和3年(1928)6月17日
蒐書Ⅵ-6	集古会端書	5月9日
蒐書Ⅵ-7	小林文七書状	大正3年(1914)12月29日
蒐書Ⅶ-1	吉田金兵衛端書	明治37年(1904)2月13日
蒐書Ⅶ-2	和田萬吉書状	明治37年(1904)2月17日
蒐書Ⅶ-3	磯部亀吉端書	明治42年(1909)10月23日
蒐書Ⅶ-4	『朝鮮本計算書』	
蒐書Ⅶ-5	吉田金兵衛書状	明治37年(1904)9月6日
蒐書Ⅶ-6	文行堂端書	明治38年(1905)11月20日
蒐書Ⅶ-7	鹿田静書状	明治37年(1904)12月4日
蒐書Ⅶ-8	河井書店書状	6月12日
蒐書Ⅷ-1	和田萬吉書状	明治38年(1905)7月20日
蒐書Ⅷ-2	国書刊行会書状	明治40年(1907)7月18日
蒐書Ⅷ-3	『新群書類従』第9 国書刊行会	明治40年(1907)

蒐書Ⅷ-4	国書刊行会書状	明治40年(1907)7月23日
蒐書Ⅷ-5	『新群書類従』第3 国書刊行会	明治41年(1908)
蒐書Ⅷ-6	国書刊行会書状	大正2年(1913)12月26日
蒐書Ⅷ-7	『文明源流叢書』第2 国書刊行会	大正3年(1914)
蒐書Ⅸ-1	『送本控』	大正元年(1912)10月
蒐書Ⅸ-2	澤柳政太郎宛狩野書状草稿	大正元年(1912)11月
蒐書Ⅸ-3a	『大正十年三月至十四年二月九州帝国大学医学部眼科教室納入書目』	
蒐書Ⅸ-3b	『大正拾年八月以降九州帝国大学医書目録』	
蒐書Ⅸ-3c	『日比谷図書館二貢上錦絵類目録』	
蒐書Ⅸ-4	狩野文庫大入札会	
蒐書Ⅸ-4a	『第壹号 山帳』	大正11年(1922)4月26日
蒐書Ⅸ-4b	『第貳号 山帳』	大正11年(1922)4月27日
蒐書Ⅸ-4c	『狩野亨吉氏蔵書売立展覽目録』	大正11年(1922)4月
蒐書Ⅸ-5	狩野の債務	
蒐書Ⅸ-6	銀杏やすり	
蒐書Ⅹ-1	御寄贈図書目録	明治38年(1905)
蒐書Ⅹ-2	栄川院筆写『朝庭御鷹野之影』2巻 養川院筆写・飯嶋助九郎筆	
蒐書Ⅹ-3	第一高等学校礼状	明治44年(1911)12月25日
蒐書Ⅹ-3	御寄贈図書目録	明治44年(1911)12月25日
蒐書Ⅹ-4	東北帝国大学附属図書館受領状	大正13年(1924)6月21日
蒐書Ⅹ-5	東京帝国大学史料編纂所長礼状	昭和9年(1936)3月14日

鑑定

鑑定Ⅰ-1	科学的方法に拠る鑑定と登録に就て	
鑑定Ⅰ-2	明鑑社営業案内ゲラ	
鑑定Ⅰ-3	明鑑社の申込書と封筒	
鑑定Ⅰ-4	『時事新報』掲載の明鑑社広告草稿	
鑑定Ⅰ-5	篠原鬼子雄書状	昭和7年(1932)8月1日
鑑定Ⅰ-6	女池賢猷書状	昭和5年(1930)7月4日
鑑定Ⅰ-7	加藤正一書状	昭和11年(1936)10月9日
鑑定Ⅱ-1	狩野亨吉「天津教古文書の批判」(『思想』)	昭和11年(1936)6月
鑑定Ⅱ-2	第1153号鑑定書『鑑定日録(1)九年十年』	
鑑定Ⅱ-3	島田高敏書状	昭和13年(1938)3月16日
鑑定Ⅱ-4	第1534号鑑定書『鑑定日録(3)十三年』	
鑑定Ⅱ-5	久保貞次郎「鑑定の先達・狩野亨吉」(『芸術新潮』)	昭和39年(1964)12月
鑑定Ⅱ-6	第1739号鑑定書『鑑定日録(5)十五年十六年』	
鑑定Ⅲ-1	第1195号鑑定書『鑑定日録(2)十一年十二年』	
鑑定Ⅲ-1	鑑定事項	
鑑定Ⅲ-2a	第1700号鑑定書『鑑定日録(4)十四年』	
鑑定Ⅲ-2b	鑑定事項	
鑑定Ⅲ-2c	分析法による筆跡鑑定	
鑑定Ⅲ-2d	総合法の筆跡鑑定資料	
鑑定Ⅳ-1	鑑定関係自著の販売広告草稿	
鑑定Ⅳ-2	『科学的方法に拠る書画の鑑定と登録』(明鑑社)	昭和8年(1933)8月20日
鑑定Ⅳ-3	『書画落款印譜大全』内容見本	
鑑定Ⅳ-4	「日本鑑定協会」の事業	
鑑定Ⅳ-5	狩野亨吉・岩上方外共編『書画落款印譜大全』第1輯 武侠社	昭和6年(1931)
鑑定Ⅳ-6	緑川秀男宛書状	昭和12年(1937)1月6日

書

書Ⅰ-1	「積善之家厥福惟昌」	明治10年(1877)
書Ⅰ-2	岩波茂雄書状	大正6年(1917)12月18日
書Ⅰ-3	『漱石全集』第1巻 岩波書店	大正7年(1918)
書Ⅰ-4	『漱石全集』背文字下書き	大正8年(1919)
書Ⅰ-5	岩波茂雄書状	大正8年(1919)1月25日
書Ⅰ-6	三浦周行『法制史の研究』(岩波書店)	大正8年(1919)
書Ⅱ-1	従二位勲四等侯爵佐竹義生公墓誌銘拓本	
書Ⅱ-2	石川孫市翁頌徳碑銘	大正2年(1913)5月
書Ⅱ-3	元弘二年暦本跋下書き	大正7年(1918)7月
書Ⅱ-4	『日本科学古典全書』背文字下書き	
書Ⅱ-5	『日本科学古典全書』第12巻 朝日新聞	昭和18年(1943)
書Ⅱ-6	三枝博音「狩野亨吉先生の追憶」(「科学古典」第3号『日本科学古典全書』第12巻附録、	昭和18年(1943)
おわりに	履歴書草稿	

参考文献一覧

- 青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』中央公論社、一九八七年
- 安倍能成『狩野亨吉遺文集』岩波書店、一九五八年
- 朝倉無声『見世物研究』思文閣出版、一九七七年
- 石田義光「狩野文庫所蔵「摘文院書目」解題」『図書館学研究報告』一九八一年十二月
- 石田義光「『狩野文庫』攷（１）——『狩野文庫へのアプローチ』」『図書館学研究報告』一九八四年十二月
- 江藤淳『夏目漱石とその時代』新潮社、一九七〇～一九九九年
- 画伝子編『人物画伝』有楽社、一九〇七年
- 狩野亨吉『書画落款印譜大全』柏書房、一九九六年
- 久保貞次郎「鑑定の先達・狩野亨吉」『芸術新潮』一九八九年十二月
- 香日ゆら『先生と僕／夏目漱石を囲む人々（１～４）』メディアファクトリー、二〇一〇～二〇二二年
- 鈴木正『狩野亨吉の研究』ミネルヴァ書房、復刊版、二〇一三年
- 鈴木正『増補狩野亨吉の思想』平凡社、増補版、二〇〇二年
- 反町茂雄『紙魚の昔がたり（明治大正編）』八木書店、一九八七年
- 反町茂雄『一古書肆の思い出（１～５）』八木書店、一九八六～一九九二年
- 中村士「狩野浩吉の天文暦学書蒐集と天文学者平山信の親交」『東洋研究』二〇〇五年一月
- 八田三喜「狩野亨吉先生」『科学史研究』一九四三年六月
- 原武哲ほか『夏目漱石周辺人物事典』笠間書院、二〇一四年
- 原田隆吉「『狩野文庫』の蔵書構成の研究（１）」『図書館学研究報告』一九八一年十二月
- 村田由美「熊本時代の狩野亨吉日記」『方位』二〇〇九年十一月
- 村田由美「熊本時代の「狩野亨吉日記」に見る漱石の新事実」『近代文学研究』二〇一一年四月
- 矢島玄亮「狩野文庫とともに」『図書館学研究報告』一九八三年十二月
- 「古書林回顧・座談会」『ブックレビュー』一九二八年十月
- 「名士談話倶楽部」『実業之日本』一九〇九年十月

教育者・蒐書家・鑑定人 狩野亨吉 生誕 150 周年記念展

会期 2015 年 10 月 17 日(土)～12 月 6 日(日)

主催 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館、
東京大学駒場図書館

後援 目黒区教育委員会、駒場友の会

執筆者 安達裕之(東京大学名誉教授〈蒐書、鑑定、書執筆担当〉)
丹羽みさと(東京大学駒場博物館非常勤職員〈生涯執筆担当〉
・責任編集者)

発行者 東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館
2015 年 12 月 6 日発行